
悠久の終わりに

神楽あまみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悠久の終わりに

【Nコード】

N2287D

【作者名】

神楽あまみ

【あらすじ】

柚賀原瑞希が故郷である西織村に帰ってきてから五年、世界は何事もなく、穏やかな日常が流れていた。仲間達と過ごす日常は輝きに満ち、ここは自分の居るべき場所だった。しかし村では死者が多発していた。語り継がれる瑞狐の伝承。村を支配する九條一族。湖月島に眠る神社の謎。数々の謎が絡み合い、瑞希は運命に翻弄される。果たして瑞希は日常を取り戻せるのだろうか。

1 - 1 図書館から学校へ

一日目

声が聞こえる。聞こえてくる。

凜とした声。透き通るような冬の空気にも似た響き。

それでいて、どこか幼さを感じさせるような声。

声は優しさを奏で続ける。

声は癒しを与えてくれる。

声は懐かしさを思わせる。

そして、声は寂しさに彩られていた。

1

2

「おきてーっ！っ！」

机に突っ伏して気持ちよく寝ていたぼくの耳から入り込んだ音が、頭蓋の中で反射を繰り返して脳髄をかき回した。

「うああああーっ！」

大音量の高周波に吃驚したぼくは、無様に悲鳴を上げて飛び起きる。

バゴムー！

もの凄い音を聞いたと同時に、この世の物とも思えない激痛が後頭部を駆け抜けた。あまりの痛さに椅子から転げ落ちて、両手で頭を抱えながらピカピカに磨かれた床の上を転げ回る。駆け抜けていった痛みが何度も引き返してきては、頭の中を蹂躪していく。早くどこかに行つて欲しいのに、頑強に居座つて中々立ち去ってくれな

い。

「うわゝ、びつくりしたあ」

間抜けな声が入ってきた。やっぱりあいつだ。痛みで目を開けられないけれど、こんな事をするのはあいつしかない。

「ビツクリしたのは、ぼくの方だーあっ！」

痛みを誤魔化す為に叫び返すけれど、全然誤魔化せなくて床を転げ回り続ける。いつそのこと気絶していれば痛くなかったのに。

「大丈夫？ 大丈夫だよな？ うん、それだけ元気なら大丈夫だよ。瑞希ちゃんは強い子元気な子、だよな」

勝手な言い分に、何かが切れるような音を聞いた。何が切れたのかは察して欲しい。

「うわしゃー！ー！！ きょうこそゆうるううさねー！ーっ！！」

怒りに任せて立ち上がる。何かが切れたせいなのか、後頭部の痛みが小さくなった。

「うわわっ、何を言ってるのか分からないよ。日本語を使って欲しいよ」

ぼくの頭を破壊しようとした犯人を、ひたすら睨む。しかし、その犯人は気にした様子もなく、いつもの様に笑顔を浮かべていた。

……金属バットを抱えながら。

「ごめんね、瑞希ちゃん。軽く叩いてただけど、起きてくれないからちよつと強く叩いちゃった。ホントはね、起きて頭を上げた時にチヨコンと当てようと思ったただけなんだよ」

謝罪に誠意が感じられないし、そもそも計画的な犯行じゃないか。酌量の余地はないな。

「だけど駄目だよ、瑞希ちゃん。図書館はお昼寝の場所じゃないよ」「えっ……？」

図書館？ どこ？

冷静になって周りを見回してみる。広々とした作業机が中央に鎮座し、それをパーティションで区切られた個人用の閲覧スペースが囲っている。背後には大きな本棚が立ち並んでいた。やたらと大き

な採光窓が並んでいることを除けば、間違いなく図書館の閲覧室にしか見えなかった。

そういえば村営図書館で調べ物をしていたら睡魔に負けて眠ってしまったんだっけ。本がたくさん有るところに行くのとトイレに行きたくなるって人がいるけれど、ぼくは眠くなる派閥に属していた。そもそも静かな図書館を相手に寝ない方がどうかしてる。

だったら図書館なんかに来るなよって話だけれど、家だと邪魔が入って勉強できないのだから仕方ない。もっとも図書館でも邪魔が入ってしまったけれど。

ん？ 静かな？

もう一度見回してみると、四人の閲覧者が本を広げていた。全員がネクタイなんか締めちゃって、迷惑そうな顔付きでこっちを見ていた。

五月蠅い。迷惑だ。とつとと出て行け。

そんな言葉が聞こえてきそうだった

突き刺さってくる視線が痛かった。とても言い訳ができるような雰囲気じゃない。

「ねーねー、瑞希ちゃん、みか音と付き合ってよー」

空気の読めない莫迦が、なおも騒ぎ立てる。

その様子を見つめる利用者達の視線が羨望の眼差しに変わりつつあった。場所を考えずにイチヤイチャするバカップルとも思われているのかもしれない。殺気を感じるのは気のせいではないだろう。深耶音は性格はともかく外見だけは良いからな。周りから見れば美少女に付き合ってくれと言い寄られている様に思われているに違いない。このままでは呪われかねないな。

「それはともかく、早くここを出よう。仁志田さんがくるぞ」

司書の仁志田さんはマナーに煩い。少しでも騒いでいたりすると、説教のフルコースをご馳走してくれる。

「そ、そうだね。急いで逃げた方が良いよね」

二人とも何度も説教を受けたことがあるだけあって逃げ足が上達

していた。態度を改めるよりも、如何にして逃げきるかに労力を費やしてきた二人の行動は伊達じゃない。

机の上に広げてあった教科書やノートを腕の一掻きでメッセンジャーバッグに放り込み、一目散に外を目指して駆けだした。足音なんかもちろんさせない。書棚を態と遠回りする経路を選び、書棚と本の隙間から受付カウンターを覗き込むと、幸運にも仁志田さんの姿がそこには無なかった。チャンス逃さずカウンターの前を通って扉を押し開けると、飛び降りるようにして階段を駆け下りる。訳の分からないオブジェが飾られた玄関ホールを横切り、ゆっくりと開く自動ドアにやきもきしながら外へと飛び出したのだった。

図書館を出ると涼しい風がそよいでいた。少し肌寒いかもしれない。珍しく雲が浮いていない青空に輝く太陽が紅葉で紅く染まった山々を照らしていた。

図書館の周りは樹木に囲まれており、正面には田畑が広がっていた。スズメやトンボが忙^{せわ}しく飛び交い、名前を知らない（興味ないから）鳥達が木々を涉^せつていく。見えるのは高圧線くらいなもので、建物はポンプ小屋と、村で唯一のバス停の待合い小屋くらいしか見当たらない。

山々に囲まれた湖の畔という辺鄙な場所に在る西織村でも、更に辺鄙な場所に西織村営図書館は建っていた。ここは隣町へと通じる唯一の村道が、山の稜線に沿いながら左右に分れる分岐点だ。村を出入りするには、ここを通るのが一番早いし、唯一の方法といえた。ここは本当の意味においての西織村と外界との境だ。行政界はまだまだ向こうの方だけれど、図書館から隣町までの間には山が聳えていて人家も田畑も何も無い。村人にとっては図書館までが村内であり、隣町までを隔てる山々が村外と言われている。

図書館はまさに村の入り口と言って良い場所に建っている。そのせいか村外からの閲覧客は村の中まではやってこない。何せ閲覧室

の壁には村内に食堂が無い事を伝える張り紙がしてある。昼飯を食べようと思っただけで弁当を持って来るか、隣町まで戻ることになる。

そもそも図書館のような公共の建物は人家の密集した場所に建てられることが多い。なのにこの図書館は人家から離れた場所に建てられており、とても村民の為に建てられた図書館とは思えない設備を誇っていた。

図書館は地上二階、地下一階の近代的な建物で、脇には広場までもが設けられていた。まだ建てられたばかりで、最新の設備とセキュリティが自慢らしい。

光に弱い本を扱う場所だというのに採光窓が多いのは、光の状態によって光量と向きを変更できる光学フィルターを内蔵するガラスを採用しているからだ。おかげで明るく開放感のある室内を演出している。

詳しくは教えてもらえないけれど、セキュリティも相当なものらしい。

とても村営とは思えない設備を誇り、蔵書も世界各地から閲覧希望者がやって来るほどののだとか。

立派な外見に劣らない膨大な蔵書を誇り、世界各国の稀覯本きこうほんが大量に納められているらしい。書籍の大半は貸出禁止になっており、それらの本は一階の閲覧室でしか読むことができない。

五年前は村役場の一室に、申し訳程度の図書室が在ったらしい。

村に長年住んでいる人でも存在を知らない図書室を、村に不釣り合いなほど立派な図書館に建て替えさせたのは、村の有力者である九條家からの進言と寄付によるものだと言われている。

根拠として村の収支と、九條家が所蔵していた本の寄贈が上げられている。

村役場の庁舎は消防署が同居した木造二階建ての建物で、意図していないにも拘わらず床一面がウグイス張りになってしまった見るからに古そうな建物である。毎年立て替えの審議が村議会に提出されているけれど、予算の関係で却下され続けている。

それに対して近代的な意匠を凝らした地下付き二階建ての図書館は、明らかに莫大な予算を掛けて作られているし、維持費だってバカにできない金額になる筈だ。実際、九條家から入る税収が、全て図書館の維持費で消えているらしい。

利用者の少ない図書館に莫大な予算を注ぎ込んだにも拘わらず、表だった非難が出てこないのは、九條家の意向で建てられたとの噂があるからだ。

産業も観光も無い村にとって、九條家が納める税金は無二の財源だといえる。九條家が居なくなってしまうえば、村税を幾ら上げたところで村は成り立たなくなってしまう。たとえ九條家にその気がなくても、九條家の意向は絶対の強制力を持って受け取られるのだ。

図書館の脇に在る、これまた意味の分からないオブジェに埋め込まれた時計を見上げて時間を確認すると、ここに来てから一時間ほど経っていた。勉強を始めてから十分くらいで寝てしまったから、五十分ほど昼寝していたことになる。……何しに來たんだろうな。

ぼくの名前は柚賀原瑞希。ゆがはら みずき

ここ西織村へは五年前に越してきた。両親の離婚を契機に、親父の実家である祖父の家に親子共々転がり込んだのだ。なにしろ当時の親父には金も無ければ職も無く、唯一の親族である親元に戻るしかなかったのだ。男の出戻りつてのも、なんだかなって感じた。

住み慣れた都会からド田舎に越してきたぼくは祖父との三人暮らしを始めたのだけれど、その祖父も三年前に亡くなってしまい、今は親父との二人暮らしを続けている。

越してきた当初は特殊な村の成り立ちに戸惑いはしたものの、住民の悠々閑々とした空気がそうさせたのか、すぐに慣れてしまった。思えばあの当時のぼくはビデオゲームができればどこに引っ越そうが構わないと思っていた。どうせゲームよりも面白いことなど無いのだからと。

だけど、今は違う。やっぱり何も無いというのは退屈なのだ。

村には生活に必要とされる店しかない。ゲーセンはおるかコンビニすら無く、娯楽らしいものは居酒屋にあるカラオケ程度のものだ。しかし、そのカラオケですら大人の娯楽と思われており、置いてある場所からして子供には縁のない娯楽だ。

ゲームやマンガが欲しくても、隣町まで買いに行かなければならないのは苦痛といえた。距離的には大したものではなくても、その道の程の苦労は大変なものだ。この西織村は山の中に開けた行きは下り坂だけれど、帰りはそこを上ってこななければならないのだから苦痛だ。

ああ、早くこの村から出て行きたい。

とにかく、一刻も早く図書館から離れようと思い、公園を早足で通り抜ける。駐輪場に自転車を取りに行かなくてはならないからだ。駐輪場は景観を損ねるからと、少し離れた場所に作られている。脇道を山へと入り、少し登ったところに駐輪場が在った。駐輪場の更の上に公共の駐車場が在って、いつでも何台かの車が駐車されている。

信じられないくらい豪華な図書館だというのに、村人が利用しているところを見たことがない。住宅街から離れているのに難しい本ばかりで、それなのに貸出をしてくれないのだから村の人達が来ないのも当然と言ってもいいと思う。

「うわん、ちよつと待ってよ。歩くの早いよ」

急ぐぼくの前に回り込んで立ちふさがった。興奮してバットを振り回すものだから危なくて仕方ない。

「待ってって言うてるじゃない。聞こえてないのかな」

「聞こえてるよ。無視してるの、無視」

「なんで！　なんで無視するの。瑞希ちゃんの意地悪。いじめっ子！」

この逆ギレしているのは向坂深^{さきさか}耶^{みかね}音という、男子だけでなく女子からも「黙っていれば……」と言われ続ける薄幸の少女だ。

うちの裏手に住む向坂家の次女で、ぼくと同い年だけでなく、同じ誕生日だという希有な存在だ。まさか時間まで一緒じゃないだろうな。

深耶音とは五年前からの付き合いだけれど、生まれてからずっと一緒だったような気がするほど、いつも付きまといてくる。手足をばたつかせて怒っている深耶音を見ていると年下としか思えないのだけれど、なぜかお姉さん振る時がある。都会の大学寮に寄宿している天音姉さんにでも憧れているのだろうか。

まったく。怒りたいのはぼくの方だ。

深耶音がいつも邪魔をするから、わざわざ図書館まで行っていたのだ。とても静かで、冷暖房が完備されていて、睡眠導入効果のある本がたくさん置いてある、勉強と昼寝には理想的な場所だったのに。あれだけ騒がれては、しばらく図書館には入れない。

せっかく深耶音には秘密にしていたのに、一ヶ月足らずで突き止めやがった。しかも、場所柄を弁えずに騒ぎやがるし。

早く新たな隠れ家を見つけないと、ぼくの憩いの時間がなくなってしまう。

「えーと、それから、それからあ……ううう」

言葉に詰まり、俯きながら唸りだす。深耶音は相手を罵る語彙がとても貧困で、すぐに考え込んで唸りだしてしまう。一旦こうなると再起動するまでが長いので、いつもこっちから折れることになる。「それで、何か急用なの？ わざわざ図書館まで押し掛けてきて」

一瞬きよとした表情を浮かべる深耶音。やっぱり怒るのに手一杯で、用件を忘れていたみたいだ。

「そうそう、瑞希ちゃんにお願いがあつて来たんだよ。誠人ちゃんが急用で今日の練習試合を欠席するって言うんだよ。いきなりすぎだよ。だから、瑞希ちゃんに試合に出て欲しいんだよ」

「そんな理由で勉強を邪魔した上に、バットで撲殺しようと殴ったのか。痛かったんだぞ」

「ちっ、違うよ。起き上がったら軽く当たるようにしてたんだって

ば。それに、寝てたよ。勉強なんてしてなかったよ」

確かに寝ていた。勉強をしに図書館まで行っておきながら、僅か10分足らずで眠ってしまった。だからといって打撃で起こされなければならぬ理由にはならない。

「早く行こうよ。みんな待ってるから」

笑いながら急かしてくる。まるで何もなかったようだ。切り替え早いなあ、こいつ。

「だから駄目だって。明後日から中間テストだろ。野球なんてしてる場合じゃないよ」

そうなのだ。月曜日から中間テストが始まるのだ。期末試験よりも重要度は低いけれど、決して疎かにするわけにはいかない。何故ならば、親父と賭をしているからだ。

全科目で80点以上をマークすれば、憧れのゲーム機『TS×365 ポータブル』が買って貰えるのだ。手の平サイズなのに三画面も付いていて、名前だってTS×365なのだ。意味は分からないけれど、何となく凄そうではないか。

厳しい目標だったけれど、みっちり勉強すれば不可能な数字ではない。その為に図書館まで行って勉強したのだ。そう、寝る為じゃない。……ないんだってば。

「瑞希ちゃんは勉強できるから大丈夫だよ。テストなんか忘れてあそば。子供は遊ぶのが仕事なんだって、母さんも言ってたよ」

「お前ん家は特殊なんだって。普通は遊んでないで勉強しろって言われるんだよ」

「瑞希ちゃんには言われたの？ 勉強しろって」

「言われる訳ないって。うちだって特殊なんだから」

「じゃあいいじゃない。ほら、行こうよ」

深耶音はぼくの腕を抱えこむと、強引に引っ張っていこうとする。

「うわ、やめろよ深耶音。離せよ。離せて、頼むから」

「駄目だよ。離すと逃げちゃうもん。……あれ？ ねえ、顔真っ赤だよ。風邪でもひいたの？」

「違うつて。これは…その…お、お前のむ、むねが…当たつて…」
がっちりと抱えられた腕に深耶音の胸が当たっていた。顔が熱くて堪らない。

「むむね？ ああ、胸だね。大丈夫だよ。みか音に気にする程の胸なんて無いから」

本気で言っているのか。大きさなど関係なく、胸は胸ではないか。
「もしかして、みか音が触れると気持ち悪い？」

微かな違和感を抱いて深耶音を見ると、いつもと同じ笑顔を浮かべていた。違和感が確信へと変わり、恥ずかしさが占めていた感情の領域が罪悪感で塗り潰される。いつも一緒にいるから分かる。笑顔に隠された、深耶音の寂しさに。

「そ、そんなことないよ。少し恥ずかしかったただけだって。わあゝい、深耶音の胸が腕に当たって気持ちいいなあゝ」

態とらしくならないように気を付けてみたけれど、絶対に態とらしさ全開だったと確信できる。演劇の経験とかないんだから当然だ。
「ほんと！ じゃあずっと掴んであげるね。まったく、いつまでもお姉ちゃん子なんだからあゝ」

分かる。これは本物の笑顔だ。間違いなく喜んでいる。

ああ、ご機嫌取りをさせられた挙げ句に、なんでセクハラ発言までさせられているんだろうか。しかも、姉貴面だし。

苦悩に歪むぼくとは違い、深耶音は満面の笑みを浮かべて微笑んでいた。なんだか少し騙された気分がしたけれど、本心から喜んでる深耶音を見ると、そんな気分なんてどうでもいいと思ってしまう。邪魔だけれど仕方なく駐輪場まで引きずられてやることにした。

…… ホントに仕方なくだぞ。絶対に嬉しくなんてないぞ。

…… ないつてば。

自転車に乗って学校に辿り着くと、試合はすでに始まっていた。

「あれえ〜。どうして。なんで誠人がいるの。用事で来れないって言ってたよね」

「おう、久々の試合に我慢できなくってさ、用事なんか適当に誤魔化して来ちまっただぜ」

こいつは三條誠人^{みじよう まさと}。

今の学年から同じクラスに成ったのを切っ掛けに仲良くなった。とはいっても、誠人から一方的に友達扱いされて辟易していたのが本当のところ、後はなし崩し的に仲良くなっていった。

自称、遊びの伝道師。

自称、遊びの創造主。

熱く燃えたぎる血潮で遊びまくる、遊びのプロフェッショナルだ。あくまで自称だけど。

遊びとなると無意味に燃え上がる、鬱陶しくて蹴り飛ばしたくなる奴だけど、様々な遊びに精通しているだけあって一緒に遊ぶと楽しかったりする。

「僕達もさぼって来たんす。血が騒ぐっすよ。今日は絶対勝つつす」
おお、みんなの瞳が燃えている！

こいつら本気だ！

ただの練習試合なのに本気で燃えている！

流石は誠人だ。すでにみんなを本気にさせている。

それにしてもテンションが高すぎて、無理矢理に引っ張ってこられたばかりにはとてもついて行けないノリだ。

「なんだよ。ただの練習試合なんだろ。気軽にやればいいだろ」

ノリについて行けない寂しさからか、つい憎まれ口を言ってしまう。分かつちやいるけど止められない。

「バツカヤロー！！なにを甘いこと言っでやがるんだ！！練習なんざ関係ねーんだよ！！やるからには全力で戦って絶対勝つ！！それが俺の正義だ！！」

誠人が熱く吼えた。いつもより盛大に燃えている誠人の気概がぼくの心に燃え移り、燦っていた魂が燃焼を始める。

そつだ。そつだつたのだ。ぼくが甘かった。所詮は練習試合と思
いこんでいた。試合の練習を本気でやらなくて、いったい何の練習
になるというのか。練習は遊びじゃない。勝負は練習の時から、す
でに始まっているのだ！

「いやいや、そんなわけないって。お前の戯れ言はぼくには通用し
ないよ。そんなことより感嘆符多すぎだから」

「ノリが悪いな瑞希！」

「お前が莫迦なんだって」

「あちゃ、相変わらず辛辣だねえ。深耶音も大変だな、旦那が偏
屈で」

誰が旦那か。人聞きの悪い。

「で？ ぼく達は何をすればいいんだ。内野か、外野か、まさかピ
ッチャーか。四番は遠慮したいな」

「瑞希は秘密兵器だ。ばれないようにベンチに座つてくれ」

「おお！ 流石です柚賀原先輩。いきなり秘密兵器ですよ。すげえ
じゃねえっすか！」

……あれ？ それって……補欠つてことじゃ……。

「秘密兵器だつて！ やったよ瑞希ちゃん」

なんで無邪気に喜んでるんだよ、深耶音。

体よくあしらわれているのにも気付かない深耶音を生温かい瞳で
見守る。どうして勉強できるくせに、こういう事には頭が回らない
んだろうな。勉強できる天然って厄介だよな。

みんなが守備に出て行くと、ぼくと深耶音の二人だけが取り残さ
れた。最初からメンバーに入っていないぼくが文句を言える筈もな
く、仕方なく深耶音とベンチを温める。

スコアボードを見ると、四つの0が並んでいた。つまり、うちの
チームは三回表の守備をしているってことだ。

いつもは一、二回に点を取られているのに、今回は珍しく一点も
失ってはいない。こっちの調子が良いのか、相手の調子が悪いのか
は分からないけれど、こっちが優勢だというのは分かった。

どうりでみんなが燃えている筈だ。勝機の見える試合でみんなが燃えないわけがない。後から来たばく達に、出番を譲る気は毛頭ないだろう。ぼくだって遅れてきた奴に譲ろうとは思わない。

対戦相手は村役場と消防の青年団で編成された草野球チームだった。野球好きの大人が集まったチームだけに県内でも強豪だったりする。名前を星乃岬ファイターズといって、地域の大会では何度も優勝している。負ける時は人数が集まらなくて不戦敗という、凄いなだか情けなんだか、よく分からないチームだ。

それに比べてこっちのチームは野球部でもなければ少年野球のチームですらない。暇な子供を寄せ集めただけの、実力もチームワークの欠片もないデタラメなチームだ。力の差は比べるまでもない。ユニフォームが無ければ、チームに名前すら無く、どこを取っても勝てる要素が見つからない。常識で考えれば勝つ確率は低いどころか皆無だった。

しかし、力の差はあっても勝敗は意外と拮抗している。星乃岬ファイターズは調整程度に試合をしているのだけれど、こっちのチームはいつも本気だった。

何故なら西織の子供達は勝利に餓えているのだ。勝利を貪欲に求め、全力で相手を叩き潰そうとする。勝つ為ならば如何なる犠牲をも厭わない修羅と化するのだ。

その気合いの差が絶対的な戦力差を縮めていた。

こんなに子供らしくないチームになってしまったのは、誠人の影響を受けたからだ。

遊びを遊びで終わらせない誠人に当初こそは驚愕したけれど、慣れてしまえば清々しく感じるようになる。そうなると末期症状だ。どんな勝負にでも勝たないと気が済まなくなってしまう。ここにいる、みんなみたいに。

「はい、お茶だよ」

深耶音が水筒の蓋をコップ代わりにしてお茶を注いでくれる。渡された蓋が仄かに温かくて気持ちいい。

「あながと」

包み込むようにカップを握ると、じわりと熱が伝わってくる。

守備に出て行ったみんなを見送ると、ぼく達にできることは応援をすることくらいしかなかった。

ユニフォームが無くてバラバラな格好をしているくせに、守備の連携は完璧と言っても過言じゃないほどに揃っていた。今回のチーム編成は当たりらしい。

対する星乃岬ファイターズの面々は、ベンチに戻って来るなり缶ビールを呷^{あお}っていた。健全な筈のスポーツを不健全なものに貶めていた。これは教育に悪影響なのか、それとも反面教師として理想的なのだろうか。

しかし、これで誠人達が異常に燃えている理由が分かった。こんなチームを相手に、絶対に負けるわけにはいかないよな。プライド的に。

本当なら中間試験の為に勉強をしたいのだけれど、ここで帰ったら燃えまくっているあいつらのことだ。きっと敵前逃亡とか、勉強虫などと、言われない誹謗を浴びせかけてくるのが目に見えている。言われても実害はないかもしれないけれど、からかわれて悔しい思いをするのは嫌だ。それに、深耶音が見逃してはくれないだろう。トイレだと言って逃げだそうとしても、こいつなら一緒に付いてきそうな気がする。

出番は絶望的だし、勉強も邪魔されて上手く行かない。深耶音と一緒にいると貧乏くじばかり引かされてしまうな。

「それにしても、お前っていつも持ち歩いてるよな、それ」

水筒を指差すと、不思議そうな表情で深耶音も水筒を見つめた。

「ん？ この水筒のこと？」

深耶音はいつも水筒を持ち歩いていた。本人に自覚はないようだけれど、ぼくには四六時中持ち歩いている印象が残っている。

幾ら田舎だといつても、飲み物の自販機ぐらいならば、ちょっと探せばすぐに見つかる。田畑の真ん中にポツンと設置されているのを見た時は、その余りのシュールさに思わず感動したものだ。

因みにその販売機は昼間は変哲のないただの販売機なのに、夜になると恐怖の販売機に変身することで有名だ。何年も交換されていない蛍光灯の発する弱々しい明かりが周囲の闇を増幅し、陰から何かが躍り出てきそうな雰囲気醸しだしてくれるのだ。

「邪魔じゃないの、それ」

水筒を指差して聞くと、笑いながら答えてくる。

「あはは、これは命のお茶なんだよ。これがないと砂漠を無事に涉れないんだよ」

「どこの砂漠を涉るつもりなのだろうか。鉄棒の前にあるやつか？　そっか。それじゃ大事に飲まないとな」

素直に理由を答える気はないらしい。別に知りたくもないし、冗談につっこみを入れる気力も減退していたので、適当に無難な相づちを返しておいた。ああ、寒い冗談で冷え切った心に、温かいお茶がありがたい。

お茶を一口啜ると、苦いような、渋いような、薬のような、何とも言えない不思議な味が口の中に広がった。

「なあ……このお茶さ。……変な味じゃないか？」

「でしょでしょ。みか音が作ったグアバ茶なんだよ。家の温室にいつの間にか生つてたから作ってみたんだよ。最初は変な味だけど、慣れると美味しく感じるようになるんだよ」

「慣れなくても美味しいお茶がいいなあ。にしても、何でもかんでもお茶にするのはやめろよ。今に死人が出るぞ」

「あはは、大丈夫だよ。飲んでくれるの瑞希ちゃんだけだから」

「ぐほっ、ゲホッ、ゲホッ」

あんまりな告白に、ビックリした咽がお茶を気道に招き入れて、盛大にむせ返ってしまった。うつつ、咽が痛い。

「あわわ、大丈夫かな。背中擦ってあげるね。…さすさす」

変な擬音を付けながら背中を擦ってくれるが、まったく効果はない。

「…エホツ、…お前：まさか、ぼくに毒味させてたのか？」

「ちっ、違うよ。してないよ、そんなこと」

「さては少しずつ毒を盛って、じわじわと殺す計画だったんだな。ちきしょー、ぼくの信頼を裏切ったな」

「違うってばあ。ちゃんとお茶になる物しか使ってないよ。それに毒なんて鑑定されやすいのなんて使わないよ。やるなら、もっと確実にやるよ」

冗談なのか、本気なのか分からない会話をしていると、背後からビニールの擦れる音が聞こえてきた。何だろうと思つて振り返ると、ビニール袋を両手で抱えたメイド姿の少女が歩み寄ってきていた。

「瑞希様、深耶音様、こんにちは」

無愛想な顔をしながら、お辞儀付きの挨拶をされる。いつも思うけれど、メイドさんに挨拶されると気恥ずかしいな。

「タちゃんだあ。こんにちはだよ、久しぶりだよ」

「いやいや、一昨日も会ってるって」

本気なのか冗談なのか、深耶音の分かりづらいボケは止めて頂きたい。

「はい。ご無沙汰しておりました。お二方ともお変わりないようで安心いたしました」

おお、深耶音のボケに付き合うなんて、なんて良い奴なんだろう。

「お買い物かな。毎日大変だね」

「そうでもありません。日課となっておりますので、散歩のようなものです。買い物は少々面倒ではありますが」

面倒なのか。

真剣な口調でそんなことを言うから、深耶音とは別の意味で本気なのか冗談なのか分かりづらい。多分本気なのだろうけれど、返事に困るからこちらも是非止めて頂きたい。

この口に衣を着せない代わりにメイド服を着こなしている少女は

矛盾^{むじよう}夕風^{ゆうふう}という、九條家の家政婦さんだ。いつも刀を背負っているのがトレードマークとなっている。夕風は小太刀二刀流の模造刀だと言いつ張っているけれど、絶対に触らせてくれないから信憑性は限りなく低いと思う。

少しぶつきらばうだけれど、気が利いていて面倒見が良かったりする。多くの村人から人望を集めている。特に村長に気に入られており、将来の村長候補として狙っているらしい。ぼくや深耶音と同じ年とは思えないほどの人望だった。

夕風が両手で抱えているビニール袋には『コンビニエンス中本』の文字とロゴが入っていた。中本のビニール袋は持ち手が弱いことで有名だった。ちょっと重い物を入れて持つと、すぐに切れてしまう。きつとコストダウンの弊害なのだろうけれど、抱えて持たないと駄目なんじゃあ、袋の役目を果たしていないよな。

『コンビニエンス中本』は西織で唯一のコンビニエンスストアを名乗る店だ。元々は魚屋だった店をコンビニ風に改築したのだけれど、今では店の名前と外観だけがコンビニと言っても過言ではない。だから、未だに中本屋と昔と同じ名前で呼ばれている。

開店当時こそ、どこかで見たようなデザインと、どこを参考にしたのか分かってしまう品揃いのおかげで、結構な客足があったらしい。しかし、その人気も二週間程度しか持たなかった。致命的な欠点があったのだ。

なんと、スーパー佐倉井の方が安かったのだ。

中本の品揃えは目新しい商品ばかりだったけれど、その様な商品に飛びつくのは若者が中心で、年配者の多い西織ではヒット商品とは成り得ない。第一、お金を自由にできる若い世代は例外なく車やバイク等の移動手段を持っているのだ。わざわざ中本で買わなくても、隣町への通勤のついでに買ってくれば済んでしまう。

そもそも、自給自足とご近所の助け合い精神が息づく西織では、お弁当やおにぎりなんて絶対に売れない。それに、手を抜いてお弁当にした日には、何を噂されるか分かったものではないそうだ。既

婚者であれば不仲や離婚が噂され、子供がいたら虐待だと児童相談所に電話されかねない。ぼくは信じていないけれど、娯楽のない地域ではよくあることだと親父が言っていた。

それだけではない。唯一の利点と言えた深夜営業も、深夜まで開店していたのは最初の一ヶ月だけ。出歩く人の居なくなる八時には閉店するようになってしまった。夜に出歩く村人は少ないので仕方ないとは思っけれど、これで唯一の利便性が無くなってしまったのだからコンビニとしては致命的だ。今ではコンビニ風のデザインが施された店舗に、雑貨屋と魚屋が一緒に同居している。ある意味では斬新かもしれないけれど、そんな斬新さは要らないだろう。

「中本屋に行ってきたんだね。魚でも買ってきたのかな」

「いえ、違います。これですが、知らないのですか」

深耶音の質問に答えて、袋から白っぽい半透明なケースを取り出した。ポリエチレン製の密閉容器だった。主に料理の材料や余り物を保存する時に使うものだ。便利な代物ではあるけれど、使い方を誤ると原子炉のように危険な物となるから注意が必要だ。

初めて使った時のことだ。電子レンジで温めたら蓋が飛び、変形して中身をぶちまけてくれた。炉心^{メルタダウン}熔融したレンジの中は凄惨を極め、深耶音にこっぴどく怒られて散々な目にあった記憶だけがあった。未だに密閉容器を見ると身構えてしまう。こういうのを心的外傷って言うのだろうか。

密閉容器には装飾などは施されておらず、蓋に品名と日付が書かれてあった。このままの形で売られているのだろう。随分と男らしいパッケージングだった。

「なんだか怪しさ満点な感じだね」

「ほふえー、これって中本屋の手作り新鮮チーズだよ。買ってる人を初めて見ちゃったよ」

「あの店って、そんなのまで作ってたんだ。ただの魚屋だと思ってた」

「いえ、作っているのは北海道で牧場を経営している親戚だそうで

す。中本は隠れた名店です。西織では需要の無さそうな商品ばかりですが、扱っている商品は一級品です。あれ程の選定眼を持つ者は滅多にいません。……商売人としては三流ですけど」

誉めながら、貶めていた。的確な分析は流石夕凧だ。

「皆様は野球の観戦ですか？」

答えづらいことを聞かれてしまった。補欠だなんて恥ずかしくて言えない。

「違うんだよ。今は敵の戦力を分析してるの。実はね、わたし達って秘密兵器なんだよ」

『重大なことを言いました』といった風情で強調されない胸を反らす深耶音。こういった状況で秘密兵器といえば、大概の人は補欠なんだと理解するだろう。なのに堂々と秘密兵器だなんて言わないで欲しい。聞いているこっちが恥ずかしいじゃないか。

「そうですか。それは大役ですね」

夕凧の微笑みに憐憫の表情が混ざっている様に見えてしまうのは、ぼくの心が貧しいからなのだろうか。

「そうなんだよ。いざって時は代打で満塁ホームランなんだよ」

いざという時はないだろうな。しかし、どこから出てくるんだらうな、この自信は。

三人で話し込んでいると、誠人が嬉しそうな表情を浮かべながら戻ってきた。

「あつれえ、矛盾じゃん。また買い出しか？ ……げっ、それって中本屋のチーズじゃんか。なんて物を買ってんだよ。そんな臭い物、人間の食いもんじゃねえよ。とっとと棄てた方が良いいぜ。ああ、そこら辺に棄てるなよ。異臭事件で警察が来るからな」

夕凧への挨拶もそこそこに、いきなり失礼な発言を連発する誠人。相手の好みもお構いなしに完全否定してのけるとは。友達がいなくなるぞ。

「おや、蛮人が吠えていますね。保健所に電話しましょう」

「なっ！？ ふざけんな、んつな物食つてる方が蛮人だあ！」

「この味は貴方のような下賤で野卑で卑しい殿方には、一生を費やしてもお分かりにはなれません。お可哀想に……」

「全部同じ意味じゃねえか。そんなことより、俺を哀れ目の目で見
るんじゃねー！」

「はあ、貴方の会話は感嘆符ばかりで疲れます」

夕凧は表情を変えずに溜息を吐いた。その態度が誠人の相手をし
たくない和雄弁に語っていた。

この二人はいつもこうだ。二人が一緒の場面に出くわすと、今と
同じように言い争いをしている。だから一見すると嫌い合っている
ように見えるけれど、実際は夕凧が一方的に嫌っているのだった。

出会えば必ず言い争いをしている二人だけれど、誠人が夕凧の事
を気に掛けているのは鈍感なばかりにだって分かる。だって、何かと
理由を付けては誠人から近付いていくし、夕凧の罵詈雑言を浴びて
も怯んだりしないのだ。

誠人が夕凧を好きなのは構わないのだけれど、好きな子に悪態を
ついて気を引こうだなんて、今時の中学生はやらないんじゃないだ
ろうか。それともぼくが知らないだけで、みんな好きな子を苛めて
るのかな。

言い争う二人をぼんやりと眺めていると、不意に音楽が聞こえて
きた。小さな音だけれど、聞き取りやすいオルゴールの音だ。

夕凧がその音楽に誘われてスカートのポケットから懐中時計を取
り出した。シルバーの細い鎖が時計から垂れ下がり、スカートと上
着の間に消えていた。銀色に輝く懐中時計は蓋付きの古くさいデザ
インで、特に変わった意匠が施されているわけでもなく、素人目に
は良い物とは思えなかった。

まあ、ぼくには時計の価値なんて分からないのだから、実はもの
凄い価値のある時計なのかもしれないけど。ぼくだったら千円台な
ら納得するけれど、万の位だったら騙されていると思うだろう。

それにしても曲名が気になった。誰に聞いても分からなくて、持ち主の夕風ですら知らないそう。貸してもらって調べる程ではないけれど、どこかで聞いた気がして聞く度に気になっていた。

「どうやら時間のようです。申し訳ございませんが、これにて失礼させていただきます。それでは再び出会えますように」

礼儀正しくお辞儀をする。挨拶を返そうと口を開こうとすると、誠人の挑発的な言葉に遮られた。

「おい、待てよ。まだ話は付いてないだろ。なんだよ。逃げるのかよ」

しつこく食い下がる誠人。夕風がしつこくされるのを嫌っていると知らないわけじゃないだろうに。もしかして態とやっているのだろうか。

「……貴方とは二度と出会えませんが」

踵を返して夕風が帰って行く。ぼくは一言で、深耶音は大きく手を振りながら挨拶を返した。

誠人は立ち去っていく夕風を見つめながら固まっていた。愚鈍な誠人でも流石に最後の一言は応えたいらしい。夕風の姿が見えなくなると、力なく地面に崩れ落ちた。

流石に哀れに思ったけれど、いつもの事なので放っておく。どうせすぐに立ち直るだろうし、なにより相手にしたくなかった。

「なあ、瑞希。聞いて良いか」

うわっ、話し掛けられちゃったよ。自ら墓穴に落ちた奴の話なんか聞きたくはない。しかし、誠人は返事を待つこともなく勝手に話し続ける。

「前から思ってたんだけどさ。矛盾って、ひよっとするとアレなのかな」

「アレ？」

「そう、アレだよ、アレ」

「だから、なんだよアレって」

要領を得ない話にイラッとしながら問い返すと、さも重大な事を

発表するかのように勿体付けながら話はじめる。ああ、イライラする。

「それはな……ツンデレだよ！」

時間が止まった。世界が凍り付いた。

我関せずといった感じで聞き耳を立てていたみんなはもちろん、深耶音ですら理解できずにきょとんしていた。

「ほら、矛盾つていつもツンツンしてるだろ。きつと二人きりになるとデレデレになるんだぜ。　ああ、みんなの前では素直になれ

ない、わ・た・し。でもね、でもね、貴方が側にいてくれると、こんなに素直になれるの。…ふふっ、ふぁっはっはっはー！」

誠人はぼくの両肩を掴んでガクガク揺らしながら高笑いを上げ始めた。ただでさえ夕風のものまねで吐き気をもよおしそうなのに、追い打ちを掛けるように揺すぶられたら本当に吐いてしまいそうだ。壊れてしまった誠人を引き剥がそうとすると、がっちりと肩を掴んだ手が更に強く掴んでくる。はつきり言っただけ。冗談じゃ済まないレベルを超えている。

「み、みかね、た、たすけて！　こいつ怖いし痛い！　引き剥がしてくれ！」

「愛と狂気は紙一重なんだよ」

「わけ分からないって！　誰か助けてくれ！」

生温かく見守るだけのみんなを呪う絶叫が、校庭に大きくこだました。

1 - 2 朝凧との遭遇

2

結局、誠人の狂乱は鳩尾に拳を叩き込むことで解決した。人事不省から目覚めた誠人は、その時のことをまったく憶えてはいなかった。ぼくも拳を叩き込んだのは忘れよう。

野球はといえば、予想どおり観戦するだけで終わってしまった。試合が終わるまで観戦しているつもりはなかったのに、途中で帰ろうとするぼくを深耶音が引き留めるので、つい帰りそびれてしまった。

絶対に出番があると信じて疑わない姿勢は立派だと思うけれど、そんな戯言を信用するほどぼくはお人好しではない。どうせ試合には出られないのだからと何度も説得したし、強行に帰ろうとした。しかし、その度に深耶音が上着の裾を握って引き留めるのだ。三回ほど帰ろうとしたところで深耶音が涙ぐみ始めたので、諦めて座っているしかなかった。

スポーツは自分でやるから楽しいのであって、見て楽しむものじゃない。ナイター中継なんて何が面白いのか理解できないし、駅伝なんて退屈すぎて見ていられない。もちろん強制するつもりはないし、共感して欲しいとも思わない。だから、ぼくにも強制や共感を求めないで欲しかった。

試合は結局負けてしまった。最終回にサヨナラ逆転打を許してしまったのだ。悔しがる誠人達は黄粉屋で反省会という名の飲み会をやるそうだ。

ちなみに黄粉屋とは、元は団子だけを扱っていた創業一二〇年の老舗で、息子が本店を隣の楠芽市^{くすめ}に移してから引退したご隠居が子供を相手に駄菓子屋として店を開けていた。

反省会には誘われたけれど、試合に出ていないのに行ったところで話に加われずに寂しい思いをするだけだ。だから用事があるからと誘いを断り、真っ直ぐ家に帰ることにした。

自転車を押しながら帰り道を歩く。隣を歩く深耶音はずっと黙り込んでいた。

「お前も行けば良かったのに、黄粉屋」

「行った方が良かったのかな」

何気なく言った言葉に、気落ちした声音が返ってきた。ぼくは余計なことを言ってしまったのだと気付く。少し考えれば分かったことだ。試合に参加できなかったことに深耶音が罪悪感を抱いてしまっていることに。

「そうは言っていないよ。たださ、深耶音っていつもぼくに付いてくるだろ。つまんないと思って、ぼくといても」

「そっ、そんなことないよ！ 楽しいよ、おもしろいよ、愉快だよ。

…… たぶん」

「たぶんかよ。立て前でもいいからホントだって言つていてよ」

戯けた調子で言つと、いつもの調子で深耶音が笑い出す。ぼくはその笑顔を見ているだけで胸の辺りが温かくなるのだった。

「瑞希ちゃんって、やさしいよね」

「や、優しくなんてないよ。お前なんかに優しくするはずないだろう。なんだか顔が熱い。もしかすると、顔が真っ赤になつてゐるのかもしれない。まったく、深耶音の奴が余計なことを言うからだ。」

「そ、そうだ。消しゴムが無くなりそうだったんだ。ちよつと佐倉井に寄つていくから、先に帰つてて」

「それならみか音のを半分あげるよ。この前買ったやつがね、とっても大っきいの。たぶん一年くらい使つても無くならないよ」

適当な理由をでっち上げて深耶音と離れたかっただけなのに、余計な提案で阻止されてしまいそうだった。

「いって。消しゴムくらい自分で買っから。それより早く帰って夕飯の手伝いをするんじゃないの」

「今日は大丈夫なんだよ。仕込みは朝やっちゃったから、後は温めるだけなんだよ」

「……そっか」

顔の火照りが感じられなくなった。もう大丈夫だろう、たぶん。それにしても気付かれなくて良かった。照れているなんて思われたら、からかわれるに決まっているんだ。下手をすると親父や夏音さんの前で言いかねないから、絶対に悟られるわけにはいかなかった。「あれ？　ねえ、瑞希ちゃん。消しゴムって、二週間くらい前に買わなかったかな」

「えっ、そうだったっけ。そう言われると、そんな気もするけど」
憶えてないよ、そんなこと。

どうしてぼくですら忘れていることを憶えているんだか。自分のことはすぐに忘れてしまったり、社会科などの暗記問題が苦手なくせに、どうでもいいことや変なことは憶えているんだよな。ここは取り敢えず、適当なことを言って誤魔化しておこう。

「ほら、書き間違えが多いからさ、すぐ無くなっちゃうんだ」

これは本当だ。どういうわけか黒板の文字をノートに写すの苦手だった。

「あはは、そうだよな。授業が終わった後なんて、机の周りが凄いくちになってるもんね」

よし、食い付いたな。このまま煙に巻いてしまおう。

「見直すと気付くんだよ、写し間違ってるの。テストの時も、考えてるのと違う答えを書いてたりしてさ、おかげで睡眠時間が無くなるんだ。早く回答欄を埋めて、寝ようと思ってるのに」

「それって寝ようと思って焦ってるから間違っんじゃないのかな。眠る時間が欲しくて急いじやってるのかな？」

「もちろんそうだよ。ぼくは睡眠時間を欲してるんだ。狂おしいほどに。……まてよ。もしかして、寝てからやれば間違えないんじゃない」

ないのか？」

「どうしてそうなるのかな。時間無くて見直しできなくなるよ」

「だからいいじゃないか。間違えてる余裕がなくなれば間違えないですむよ。逆転の発想ってやつだよ。なんで今まで気付かなかったんだろうな、ぼくの莫迦」

「……うん、莫迦だと思うよ」

深耶音にしては珍しく、微笑みを浮かべているのに無表情な、まるで哀れな子でも見るような表情でぼくを見ていた。小さく「みか音がしっかりしなくちゃ」と聞こえたのは、きつと気のせいだろう。

取り留めのない話をしていると、程なくスーパー佐倉井が見えてきた。別に買い物をする必要もないのだけれど、言ってしまった手前寄るしかなかったのだ。

佐倉井は村で唯一の総合雑貨店だ。狭い店内には商品が雑多に並べられており、とにかく通路が狭くて二人がすれ違える程度しかない。売り物の種類は多いけれど、埃を被った商品が多々置いてあるのは、食品も扱っている商店としては如何なものだろうか。掃除ぐらいしろっていうか、埃を被るほど置かれた商品の賞味期限が気になる。

当然のように文具も扱っており、専門店には及ばない品揃えながらも、文具に拘りを持たない人達には好評だった。なぜならば、僅かながらも割り引きされているからだ。

少しでも安く買って定価との差額を着服することは、小遣いの少ない学生に与えられた当然の権利だといえよう。この権利に異議を唱えるのは、小遣いに不自由しない金持ちか、子供のためとか言いながら子供を人間扱いしていない自称教育者くらいなものだろう。おっと、具体的な名前とかは言えないし、あくまでぼくの主観だから異議は受け付けていませんよ。

申し訳程度に設置された文具コーナーには先客があり、鉛筆の刺

さったケースを朝風が覗き込んでいた。

矛盾朝風は夕風の妹だった。二人合わせて風姉妹と呼ばれている。二人は双子だと主張をしているけれど、その面差しはあまり似てはいない。性格も正反对だし、趣味や味覚の好みなんかも全然違うらしい。似ているのは背丈と服装くらいだろうか。……まあ、同じメイド服なのだから当たり前なだけだ。そう言えば二人の私服姿を見たことがないけれど、買い物に来る時くらいは普段着でもいいのではないだろうか。九條家の使用人として制服を常用するのは分かれるけれど、見るからに高価そうな服を着た二人を遊びに誘うのに気が引けてしまう。遊びといえば、都会にいた時は室内が当たり前だったけれど、西織では外で遊ぶのが当たり前だ。だから服に泥や土ぼこりが付着するのは道理というもので、汚れたら困りそうな服を着ているのは風姉妹と主人の佐保くらいなものだろう。

誠人などは「メイド服は作業着だから汚してもいいんだ」などと言っていたけれど、少なくとも泥だらけにしてもいい作業着とは違うと思う。なんと言ってもメイドは清潔感が大切なのだ。誰だって薄汚れたメイドに世話を焼かたくはないだろう。

それはともかく、朝風はぼくの師匠だった。華道や茶道ではない。体術全般の師匠だ。

西織に来てからというものの、誠人と深耶音に無理矢理付き合わされる遊びの数々に連敗しまくり、負け犬街道を全力疾走していた。その汚名を返上するために、厭いとわしく思いながらも朝風に弟子入りしたのだ。聞いた話では誠人が申し込む一方的な勝負を軽く一蹴し、あの誠人が天敵と認める唯一の人物だそうで、どうしても一矢を報いたかったばくはプライドをかなぐり捨てて弟子入りしたのだ。

師匠とは言っても定期的に道場に通う様なものではなくて、朝風の気が向いた時だけに稽古を付けてもらえるという実にいい加減なものなので、これといった師弟の絆などはない。尊敬をしてはいないし、朝風も求めてはいないようだった。だから特別な扱いはしないし、朝風もしようとは思っていないようだ。

「あつ、朝ちゃんだ。奇遇だね、こんにちは」

「わあゝっ、みかつちに、瑞つちだゝ。久しぶりですねゝ。何年ぶりですか。十年ぶりくらい？」

「二日ぶりだつて。十年前は村に居ないし」

「ぼくが村に越してきたのは五年前だ。それまでは遊びに来たこともない。」

「えーっ、忘れちゃったのですか。あんなに仲良しだったのに」

「わっ、二人は幼なじみだつたんだね」

「んっなわけないって」

深耶音の驚きようからは、本気で十年ぶりに再会した幼なじみだと思っっているのが伝わってきた。相変わらず深耶音には冗談が通じない。

「あれ、忘れちゃったのですね。毎朝や・さ・し・く起こしてあげてたじゃないですかあ。『俺はイバラ王子だから、朝風のキスでしか起きない』って、我が俤^{おつじや}を仰^{おつじや}って……ポっ」

「ふ、ふ、ふた、二人とも、ふ、不潔だよ。淫らだよ。淫行だよ。そんなことしても良いと思ってるのかな。許されると思ってるのかな」

盛大に震えている人差し指を突き付け、ぼくと朝風を糾弾する。

「おっ、落ち着いて深耶音。嘘だから、大嘘だから。朝風一流の冗談だから。ほら、その証拠に一人称が『俺』になってるだろ。ぼくは俺なんて言ってないから。朝風、いい加減なこと言うなつてば。深耶音には冗談が通じないんだから」

狼狽えながら朝風の方に振り向いて注意していると、金属同士が擦れ合う澄んだ音が店内に響いてきた。素早く深耶音に向き直るといつの間にか棚にぶら下がっていた金属製直尺を抜き取り、正面突きに構えていた。鈍い銀の光沢を帯びた定規には一ミリ単位^{はもん}の目盛りが一メートルに渡って刻まれており、それがまるで刃文^{はもん}のように見えた。

ちなみに、金属製直尺つてのは言葉の通り金属で出来た物差しの

事だ。親父が仕事で使っているけれど、一般の家庭に必要とされる機会は殆どないだろう。こんな需要の無さそうな商品ばかりを取りそろえて、よく商売が成り立つものだと思う。

「ちよつ、ちよつと、危ないつて。それは洒落じゃ済まないから。

落ち着いて話を聞いてくれると嬉しいんだけど。 ちよつと、朝

凧も止めてよ」

顔だけで朝凧に振り返ると、にんまりと笑う悪魔の表情が一瞬だけ垣間見えた。

その瞬間、朝凧の罠にはまって死地に追い込まれてしまったことを自覚する。咄嗟に逃げ出す算段をしたけれど、前後を鬼と悪魔に挟まれ、左右を商品棚に挟まれている状況では逃げようがない。深耶音は武器を持っているし、朝凧は華奢に見えても武道に長けている。

深耶音を防ぐと朝凧が、朝凧を防ぐと深耶音が襲ってくるだろう。これが俗に言う『前門の虎、後門の狼』なのかもしれない。

「ごめんね、みかっち。嘘を吐いてました」

朝凧が珍しくフォローをしてくれた。雨でも降らなければいいけど。

「ホントはですね『俺様はオオカミだ。お前を食ってやる』って押し倒されたのです。でね、その後……ポっ」

フォローじゃなかった。更に状況を悪化させる気満々だ。

冗談をエスカレートさせた朝凧は、ほんのりと赤みを帯びた頬を両手で包み込むように押さえながら恥ずかしそうに俯いた。その愛々（あいあい）しい表情が、ぼくの瞳には悪魔の微笑みに映って見えた。

「更に嘘を重ねるのか！ なんだよ、その意味深な『ポっ』てのは！」

「意味どおりです。ポっ」

小さい『っ』がむかつく。なんだか『っ』だけが平仮名っぽい気がするのが精神を逆撫でして毛羽立たせてくれる。ああ、朝凧と話

長が奥の事務所兼倉庫からやって来た。たぶんテレビでも見ていたのだろう。もちろん店番なんて雇っていないので、店長が奥に居る間は店内に人の目はなくなってしまう。この店は日本一不用心な店にノミネートされてもおかしくはない。

「やあ、瑞希君に朝風ちゃん。元気……だよな」

残されたばかりと朝風を見ると、呆れた顔付きで声を掛けてきた。元気なのは見て分かるとでも言いたそうだ。

「はい、朝風は概ね元気ですよ。夕姉も元気だと思います」

呆れたような店長と、何事もなかったかのように返事をする朝風。親子ほども歳の離れた少女が相手なのに店長は朝風に対しては注意をしづらそうだった。たとえ相手が使用人でも、九條家に関係している者を相手には文句を言いづらいのだろう。

そんな店長の態度に何かを感じたのか、朝風の表情が真面目なものに切り替わる。

「お騒がせ致しまして、申し訳ございません。今後はこの様な事の無きよう留意致しますので、どうかお許し下さい」

両手を前で揃えると、丁寧に腰を折り謝罪する。流石は九條家を影から取り仕切っているだけあって、メイドモードに切り替わった朝風の態度は堂々たるものだった。こうして礼儀正しく振る舞っていると、夕風と重なって見えるから不思議だ。

この突然切り替わる態度に最初は戸惑いもしたけれど、慣れてしまうのに然程の時間は掛からなかった。もちろん、村の人々も慣れているので、今更驚きもしない。

「ああ、いいよ、いいよ。どうせ他に客もいないんだしさ。子供は騒がしいくらいが丁度良いのさ」

「あははっ、そうですね。子供は元気でなくちゃダメですよ」突然に通常モードに切り替わる。慣れている店長は朝風の突然の変化に驚きもしない。しかも朝風を子供扱いするその様は、まるで家族のようだった。実際に村の人間は皆が家族のような気安さがあり、他人の子供を誉めたり叱ったりするのは特別珍しい光景ではな

い。

「それより瑞希君。深耶音ちゃんは何を持って行ったのかな。……ああ、物差しか。あれは売れなかったなあ。需要あると思ったんだけど」

店長は深耶音が商品を持ち出したのに気付いていた。大声で万引きだとか叫ぶんじゃないかった。このままでは深耶音が本物の泥棒になつてしまいかねない。何か上手い言い訳はないだろうか。

「あれってツケでいいのかな。それとも返品かい？」

必死で言い訳を模索するべくに対し、店長は商品を勝手に持ち出されたことを気にしてはいないようだった。流石は店番もしないでサボっている店長だけのことはある。多らかというか、いい加減というか。

「えっと、……すみません。追いかけて取り戻してきます」

どう考えても、深耶音にあんな物差しは必要ない。ここは深耶音を見つけて返品させるのが良いだろう。

「待って下さい！」

捜しに行こうとするべくを朝凧が止める。無視して進みたかったけれど、そんなことをすれば何か仕掛けてくるのが予想できたので従っておく。

「みかっちはすぐに戻って来るのです。みかっちが泥棒をするはずがないのですから、行き違いにならないように、ここで待っている方がおすすめです」

「それはそうだけど……」

朝凧の提案はもっともだった。落ち着けばすぐに戻ってくるだろうし、捜しに行つて行き違いになるよりも、ここで待っていた方が間違いないだろう。でも、ここで何もしないで待っているのは店長に悪いような気がするし、気まずくてこの場には居たくない気がする。

「それがいいね。店^{うち}はちゃんと戻してくれば、いつだって構わないから。どうせ売れないからね。なに、相手はあの深耶音ちゃんだ。

すぐに戻ってくるさ」

売れないのを確信していた。埃を被っている商品が多い理由が垣間見えた気がした。

「そうですか？ それじゃ、ここで待たせてもらうことにします」

「それじゃあ、ボクは奥にいるから、深邸音ちゃんが来たら呼んでね」

「はい、分かりました」

店長はぼく達を残したまま、また店の奥に戻ってしまった。あくまで店番をする気はないらしい。大物なのか、ずぼらなのか。

「それでは、みかつちが戻って来るまで朝風が話し相手になってあげますね」

「あげますって……朝風が原因だと思っただけ。……まあいいや。ところで朝風は何を買いに来たの？」

「ふっ、ふっ、ふっ、よくぞ聞いてくれました。じゃじゃじゃーん、これでーす、この鉛筆を買いに来たんです！」

「そんな大袈裟に発表されても……ていうか、なんで鉛筆。シャーペン使えばいいのに」

「夕姉が鉛筆派なんです。シャープペンには暖かみがないから、姫様に使って欲しくないんだって。しかもですね、姫様って鉛筆を一本しか持ってないんですよ。鉛筆だけじゃなくて、食材とかも買い置きをさせてくれないんです。なくなる度に買い出しに来るのは面倒なんで宅配にして欲しいんですけど」

「あそこに配達するのは無理じゃないかな。だいいち鉛筆一本だけじゃ持ってきてくれないよ」

「ふっふっふっ、九條家を舐めて貰っちゃ困ります。その気になればお米一粒はもちろん、オーストリア大陸だって持ってこさせます」

「自信の程は分かったけど、大陸はオーストラリアだから」

「遅れてるなあ瑞つち。今の若者はら抜き言葉を使うんですよ」

「それ意味が違うから。それと今の若者とか言つと年寄り臭いよ」

相変わらず朝風の言ってることはいい加減だ。これで九條家当主

の専属メイドだつて言うんだから、九條の内情は推して知るべしだ。
「あれ、いま『こんなの雇ってるんだから、九條家つて大したこと
ないなあ』なんて思いました？」

「はっ、はっ、はっ、思つてないつて」

これ以上ないつて位の爽やかな笑顔で答える。

「うわっ、気色悪いです。そんな顔していたら肯定してるのと同じ
です」

「そんなことないつて。気のせい、気のせい」

「二回繰り返し返すのつて、大概は誤魔化す時です。まあ、いいですけ
ど。これで良いかな」

朝凧がピンク色の鉛筆を選び出した。三年くらい前に放送してい
た魔法少女のキャラクターが小さくプリントされており、どこから
見ても小学低学年をターゲットに販売された商品だった。

「子供でも遊びに来てるの？」

「はい？ 何のことですか」

「えっ、だつて、それつてどう見ても小さい子供向けの鉛筆だろ」

「違いますよ」。これはいい歳した大人が買うものなのです。子
供騙しの見え透いた商品を、子供が買うわけありませんから。子供
向け商品ほど大人によく売れるんですよ」

何かが間違っている気もしたけれど、あまり触れない方が良くと
理性が警告してきた。ここは話を流すべきだとエマージェンシーコ
ールが鳴り響いている。

「じゃあ、朝凧が使うの？」

「まっさか」。朝凧は鉛筆なんて使わないのです。そもそも筆記用
具を持っていません。これは姫様の勉強道具なんですよ」

姫様とは、九條家の家長である九條佐保のことだ。凧姉妹だけで
はなく、みんなから姫様と呼ばれている。姫と呼ばないのは、ぼく
と深耶音くらいなものだ。

「佐保が使うなら、もっと落ち着いた感じのが良いんじゃないの」
「分かってないですねえ。まったく分かっていません。ダメ、ミッ

チーはホントーにダメダメです」

「誰なんだ、ミッチーって」

「いいですか。姫様もお年頃なんです。かわいいのが良いに決まっています」

「それは朝風の趣味じゃないの。佐保は違うと思うし、お年頃とか関係ない」

佐保の服装を思い浮かべてみるけれど、地味な意匠が施された着物姿しか思い浮かばない。魔法少女でピンク色な鉛筆を使っている姿は想像すらできなかった。

「姫様は立场上あんな格好してますけど、部屋の中はファンシーでメルヘンなんです。あつ、これって口外したら消されますから、気を付けて下さいね。冗談ではないですから」

消すって記憶を？ それともこの世から？

九條ならやれそうな気がするから怖い。ていうか、お前は口外しても良いのか。

「あのおー、すみませーん」

そんなこんなで九條家の暗殺部隊に付け狙われる恐怖に震えていると、入り口から弱気そうな深耶音の声が聞こえてきた。どうやら戻ってきたようだ。

「おかえり」

ぼくが何事もなかったかのように声を掛けると、俯きながら深耶音が入ってくる。お腹の前で組まれた手の中には、棚から持ち出された物差しが握られていた。その様子は、まるで罪の意識に苛まれて自首してきた犯罪者ようだった。

「おや、みかっち。やっと自首する気になったんですね」

そんな深耶音に容赦なく追い打ちを掛ける朝風。

「うつつ、悪気はなかったの。気が付いたら握りしめてたの」

「魔が差したのですね。大丈夫ですよ。警察の方には九條家からお願しておきますから。きっと情状酌量されますよ」

「う、ごめ、ごめんなさい……うつつ、うつく……」

あつ、やばい。深耶音が泣きそうだ。からかい過ぎだぞ、朝風の奴。

ぼくが止めようとする前に朝風が動いた。深耶音にそっと近づくと、優しく抱きしめて囁きかけた。

「大丈夫ですよ。みかつちが悪くないのは朝風が知っています。これから世界中が敵になっても朝風だけは味方です。瑞っちは敵ですが、朝風は味方ですよ。ああ、かわいそうなみかつち。瑞っちに騙されて金尺を握ってしまったばかりに全世界を敵にしてみました。それなのに、瑞っちは世界の側に付いたんです。とんでもない裏切りです。さあ、一緒に悪を殲滅しましょう」

深耶音の頭を撫でながら、優しい言葉を掛けて洗脳していく朝風。まったくバカバカしい。そんないい加減な話を信じる奴なんていないって。

「うん、ありがとう。一緒にがんばろうね」

うわっ、ここにいたよ。とびきりの莫迦が。

「いい加減にしろよ朝風！　いくら深耶音が信じ込みやすい莫迦だからって、ホントのことと作り話を見抜けないおマヌケだけだからって、すぐ勘違いして迷惑掛けまくる短慮で浅慮な思考回路だからって、嘘を教えるのは駄目だぞ」

「短慮と浅慮は同じ意味なんじゃないですか」

そんなツツコミは要らない。

「……ええつとお、みか音、もしかして非道いこと言われた？」

「はつきりと言いましたね。朝風が言われたら死にたくありません」

「ひ、ひどいよ、瑞希ちゃん」

目じりに溜まっていた涙が頬を伝い、リノリウムの床に落ちていた。

「うわっ、な、泣くなよ深耶音。全部冗談なんだからさ。そ、そうだ。ほら、ぼくだってずっと味方だから。全世界が敵でも味方になるし、朝風が襲ってきたらボッコボコにして追い返してやるから。だから……、朝風、何とかしてよ。全部お前の所為なんだから」

深耶音を慰めてみたけれど泣きやむ気配がない。仕方なく朝凧に助けを求めるけれど、朝凧からの返答は礼儀正しくも理不尽なものだった。

「私の所為と仰いまして、何のことだか分かりかねます。それと、これは女の子を泣かせた罪です。　　えい！」

朝凧が掛け声を掛けると、頭に激痛が走った。

「ぐおおおおおおあああああああああああああ」

何が起ったのか理解できなかった。痛みが思考を遮り、頭の中を空っぽにする。頭を両手で掻きむしるように摩りながら、両膝を床に着いて蹲る。

頭をブンブンと振り回すなか、踵を返して走り去って行く朝凧の姿を見たような気がしたけれど、そんなことに構っていられる余裕なんかなかった。痛みを消してくれと、信じてもない神様に祈ながら頭を摩っていると、何とか我慢できるくらいまで痛みが引いてくれた。ありがとう神様。これからも都合の悪い時は頼るからお願いするよ。

「大変、大変だよ。瑞希ちゃんがうずくまっちゃったよ。どこが痛いのか？　ここ？　ここかな？」

深耶音が心配してくれる。心配されたからといって別に痛みが引いてくれるわけではないけれど、気持ち的には楽になった気がするから不思議だ。しかし、その気分も長くは持たないのだけれど。

「ぐわっ！　や、やめて。痛、痛いってば。ぐあぁっ、い、痛いから触んなってば！」

激痛の時は摩ることで痛みが引くような気がしていたのに、痛みが落ち着いてきた途端に触るだけで激痛が走るようになった。だから触らないようにした途端に、心配した深耶音が遠慮なく触ってくる。こういうのを有り難迷惑というのだろうか。

「ほーら、痛い痛い飛んでけ」

「痛っ、だから、お前が触らなきゃ痛くないんだってば」

痛みが走る度に朝凧への恨みが積み重なっていく。いったい何を

したのかは分からないけれど、この積怨は必ず返してやるからな。
ガバリと起き上がると、滲む視界で朝風が消えていった出入り口
を睨み付け、村のどこに居ても聞こえるようにと力の限り叫んだ。
「憶えてろよ朝風――！！ 絶対にお返ししてやるからな――！！」
村中に響き渡ったかは分からないけれど、奥に引っ込んでいた店
長が飛び出してくるくらいには響き渡っていた。

1 - 3 空からの来訪者

3

迷惑を掛けてしまったことを店長に謝ってから店を出ると、すでに表は薄暗くなっていた。

西織を取り囲む山々が集落に濃い影を落とし、視界に不自由するほど暗くなっている場所を作っている。四時を廻ったばかりだといふのに、すでに照度センサーが反応した街灯が点り始めていた。しかし、空を見上げてみれば、まだまだ明るい青空が広がっている。山の稜線から昼と夜とがはっきりと分かれて世界を二分していた。

空の明るさが地上の薄暗さを否応無しに際立たせ、山の陰になる場所では夜の様相を醸し出していた。村には街灯が申し訳程度にか立っていないので、後数刻もすれば村の殆どの場所は闇に覆われてしまうだろう。特に月も星も無い夜には深い闇が村を漆黒に塗り潰してしまう。どこにいても不自由しない程度には明るかった都会とは大違いだ。

西織の集落は山奥と言っても良い場所に在る。四方を山に囲まれ、星乃湖の辺に開けた僅かばかりの湖盆に、民家と田畑が申し訳程度に広がっている。山奥にしては規模が大きく、二千人に近い村人が住んでいた。

西織村は豊かな自然に恵まれた風光明媚な所で、一見すると観光地や別荘地として申し分ない場所に見える。夏は涼しくて避暑地として最適であり、秋は紅く彩られた山々が素晴らしい景観を見せつける。冬は寒さが厳しくてあまりお勧めはできないけれど、春に芽吹く草木や花々の美しさは、厳しい冬を耐えてきたものだけが見せる輝きを放っていた。

そして何よりも星乃湖の存在が大きい。青く澄んだ、透明度の高

い水質と、波の風いだ時に映り込む景色の鮮やかさは、見た者を感じ嘆かせずにはいられない。

しかし、これ程の観光要素を内包していながら、今まで観光地化されることはなかった。様々な企業や行政が観光地化に名乗りを上げたけれど、必ず用地買収に失敗して頓挫していた。何故ならば、西織村全域が九條家の敷地だと言ってしまうても差し支えないからだ。

今でこそ各家の敷地や田んぼ等はその家の家族名義となつてはいたけれど、元々は九條家が所有していた土地だったのだ。大東亜戦争終結後に行われた農地改革によって耕作者に権利が譲渡されたのだけれど、村人は譲渡された後も勝手に売却したりせず、九條家に義理立てをしている家が殆どだ。その為に観光地化されずに取り越されてきた。

農地改革を簡単に説明するならば、土地を独占して所有していた地主から国が強制的に取り上げて、実際に田畑を耕作している小作人に無償で譲渡させた改革だ。

元々の地主にとっては迷惑極まりない改革だけれど、ただ権利を持つて管理していただだけの九條家にとっては、書類上の名義が換わっただけの話だった。なにしろ借地料などの費用は取っていなかったし、売却できたとしても二束三文にしかない。むしろ税金の負担が減ってくれる分だけ、九條家にプラスだったかもしれない。

困惑したのは九條家よりも譲渡された村人の方だった。不満も不都合もないのに土地を譲渡され、今まで九條家が納めていた税金などを自分達で払わなければいけなくなった。それはまるで、国が九條家から奪った土地を村人に貸し与え、税金という名の借地料を取っていると感じさせた。

だからなのか、西織に住んでいる者達は未だに九條家を君主のように崇めている。しかも最たる行政機関である村役場ですら九條家の言葉には従順だった。もっとも、村の行政機関で働いているのは村人なのだから、九條家を特別視しているのは当然といえば当然な

のだけれど。

星乃湖^{ほしのうみ}を左手に望みながら、のんびりと家路を歩いていく。湖の対岸には九條屋敷に点った明かりが星のように瞬いていた。右手には様々な作物が植えられた畑と、生け垣越しに明かりの点る民家が見てとれる。山の陰から逃れた場所は未だ明るいというのに、この辺りには早すぎる夜が訪れていた。

隣には深耶音が歩いている。向坂家はうちの裏だから、遊び場所や学校への行き帰りはいつも一緒だった。

「それにしても痛かったなあ」

頭を擦ってみると、鋭い痛みが疼いている場所が瘤^{こぶ}となって腫れているのが分かる。自転車に乗るとズキズキと疼くので、仕方なく歩くことにしたのだ。

「瑞希ちゃん、ごめんね。助けてあげられなかったよ。みか音もつと強くなって、次こそは絶対に助けてみせるよ」

深耶音が済まなさそうに謝ったかと思った途端、決意を込めた瞳で決意を表明してきた。けれど次なんかあつて欲しくはないし、自分で対処した方が間違いないので深耶音に助けてもらう気なんて更々ない。

「君には期待しておりません」

「あうっ、ひどいよ瑞希ちゃん。少しは期待してよ。選挙の公約くらいは期待してよ」

わざと丁寧に答えると、深耶音は傷付いたとばかりに呻いた。しかも、期待して欲しいのか、して欲しくないのか分からない例え付きだった。

「それにしても朝風の奴、今度会ったら絶対に仕返ししてやるぞ」
思い出すだけで怒りがこみ上げてくる。

「仕返しはいいけど、女の子を叩いたりしたらダメだよ」
いいのか、仕返し。

「分かってるよ。だから口では言えないような酷い目に遭わせてやる」

「何だか悪役みたいだよ瑞希ちゃん。でも酷い目ってなんだろう。…まさか、オオカミになって……」

「ええい、それは忘れろ」

流石に朝風の冗談だったと気付きはしたけれど、未だ内容に引っかけりを憶えているらしい。深耶音にとっては衝撃的な内容だったのだろうけれど、いつまでも引つ張られるのは気分が良くない。ここはひとつ、深耶音の為にも忠告しておいてやろう。

「深耶音、いい加減に何でもかんでも信じるのは止めた方がよいよ。特に朝風の冗談を信じると命に係わるからな」

「でも信じるのは大切なことだよ」

「限度があるんだって。冗談だと分かってて信じるのと、分かっていなくて信じるのには、決して超えられない大きな隔たりがあるんだ」

「分かってて冗談を信じちゃダメなんじゃないかな」

違う。そんなことが言いたいのではない。論点が違うと思うけれど、考えなくて良い所を考えてしまうのが実に深耶音らしい。深耶音は「んー」と考え込むけれど、どうせ理解はしていないのだろう。「大丈夫だよ。朝ちゃんも友達だもん。襲ってきても命までは取らないよ」

いやいや、友達だったら襲ってこないって、最初から。

しかし朝風はやバイ。隙があれば容赦なく襲ってくる。今日など隙を見せたつもりもないのに、いつの間にか頭を叩かれていた。奴に隙を見せたらいつの間にか昏倒させられて臓器バイヤーにでも売られているかもしれない。確かに誠人に勝てるように鍛えてくれとお願いしたのはばくだけけれど、ここまで来るとやり過ぎだろう。徐々に巧妙になる手口に対処し、いつ襲ってくるのか分からない緊張感を維持し続けるのは不可能だ。でも効果があるのは確かなので、今のところ止めるつもりはない。

家の近くまで来ると、西から差し込む夕日によって朱く染まっていた。未だに日の当たっている山の頂付近が茜色に染まり、夜の当来が間近に迫ったことを告げていた。

取り留めのない話を交わしながら家の前まで来ると、隣地前の道路に人が集まっていた。こんな時間に井戸端会議でもあるまいに、みんな集まって何をしているのだろうか。

「あれ、米沢のおじちゃんだ。濱見のおじちゃんもいるよ。森崎さんに利根塚さんに野際さんまでいるよ」

「ご近所さん大集合だな。こんな所で何してるんだろ？」

近づいて確認してみると、ご近所さんが六人も集まっていた。薄暗い道路に屯たむろしているご近所さん。隣町への力チコミか、銀行を襲撃する予定なんかを話し合っているに違いない。

「おう、帰ってきたか、愚息よ」

ご近所さん達から少し離れた所に親父と深耶音の母親である夏音さんがいた。

親父はどうでもいいとして、夏音さんがこんな時間に帰っているのは珍しい。いつもは仕事で遅くにならないと帰ってこないのに。

「どうしたんだよ親父。みんなして集まって」

「どうしたじゃねえよ。見りゃわかんだろうが」

親父は言いながら空き地に向けて左腕を振りかざすと、人差し指を伸ばして指し示す。ぼくと深耶音の視線が指の先を辿っていくとお昼に見た時には無かった建物が、隣の空き地に建っていた。

それは洋館だった。凝った意匠を施され、暗くくすんだ赤で統一された色調の中で、白く塗られた大きな窓枠だけがやたらと目立つ。大きなテラスの上はサンルームになっているのだろうか、平面ガラスを何枚も使うことで曲線を作りだし、まるで植物園の温室のようだ。屋敷の裏手には円筒の塔屋まで建っていた。古くさいデザインのはずなのに古さを感じさせず、積極的に明かりを取り入れるデザインでありながら、重厚な威容を誇っている。しかし、赤を基調とした采色が、何となく不吉な印象を醸し出していた。

古ぼけた木造建築が立ち並ぶ村にあつて、一部に石造りを取り入れた意匠は明らかに周囲から浮いているのにも係わらず、特別珍しい景色とも思えなかった。何故なら九條の屋敷群を見慣れているからだ。

「……なあ、親父。こんなにでつかくて豪華な家を半日で建てるには、何をどうすればいいんだ。大工さんを五百人くらい集めればいいのか？」

「ふっ、莫迦を言うな愚息よ。何千人集めようと絶対に無理だ」

「絶対に無理な建物が、どうしてここに建ってるんだよ」

「運ばれてきたのよ。空からね」

ぼくの疑問に答えてくれたのは夏音さんだった。娘と違って冗談の通じる人なのだった。

「ははっ、やだなあ、あんな大きくて重い物が運べるわけないじゃないですか」

「私もそう思うのだけどね。見た人が居るのよ。何台ものヘリコプターが吊り下げてきたんだって」

「えーっと、冗談じゃなくて本気で言ってます？　ちょっと信じられないんですけど」

「意見が合つて安心したわ。私も信じられないのよね」

夏音さんに言つた台詞を受けて、近所の人達が集まってくる。どうやら目撃者のようで、聞いてもないのに目撃談を話し始めた。

「いやいや、本当なんだって。でっけえヘリコプターが運んできたんを、しっかり見たんだからよ。なあ、元子さんよ、あんたも見たよな」

「見た見た。洗濯もん取り込んだら家が飛んどるんだもの。ビツクリしてカゴを落としちゃったんよ」

「家のばあさんなんざ、呪いだゝ、祟りだゝって騒いで閉じこもっちゃまったんよ。そげにしても、近頃の引越しは派手やんなあ」

嘘や冗談を言っているようには見えないし感じないけれど、それでも信じられない気持ち勝っていた。こんなに大きな重量物を持

ち上げることが出来るとは思えないし、何よりこの屋敷からは長年そこに在ったかのような存在感を抱かされるのだった。ここに建っているのが当然で、とても自然なことに感じていた。しかし、そんなことは有り得ないし、この郷愁にも似た感情だつてどこかで見た景色と勘違いしているだけなのだ。

取り敢えず、異口同音に騒ぐご近所さんの言葉をまとめてみよう。ぼくが図書館に出かけて直ぐに何台ものトラックやワンボックスのライトバンがやって来たらしい。何人も作業員が基礎部分に機械を取り付けていたが、それが何なのか詳細は分からない。米沢さんが声を掛けてみたけれど、危険だからと追い出されてしまい、何も答えてはもらえなかった。

そのうち機器の設置が一段落したのか作業員がお茶を飲み始めると、爆音を轟かせながら四台のヘリコプターが家を運んできた。家は大きな風船の様なもので吊り下げられており、それをヘリコプターで引つ張ってきたらしい。

ゆっくりと降ろされた家が基礎に固定され、電気や水道が引かれ、ガスボンベが設置された。屋敷中の照明が点いたり消えたりを繰り返すと、全ての作業が終了したのか作業員が撤収していった。

ずっと見守っていたご近所さん達は、そのあまりの手際の良さに感心するしかなかったそうだ。というか、ずっと見てたのか。まったく暇人ばかりだな、この村は。

「じゃあ、もう住めるんだ。明日にでも引越してくるのかな」

「しかし大胆だぜ。木造の洋館を丸ごと運んで来るなんてな。歪んだりしそうなものだが。まったく、技術の進歩って凄えな」

木造家具造りを生業にしている親父には、住人よりも家の方に興味があるみたいだ。ぼくとしては建物よりも、こんな変わった引越しをしてくる住人に興味があつた。きっと、とんでもない変わり者に違いない。

「ふえー、運ばれてくるとこ見たかったよお。誰かビデオ撮ってないのかな？」

洋館を食い入るように見ていた深耶音が、自分も見なかったと騒ぎ始めた。野球なんてして観戦していなければ見られたんじゃないかとは思っても、口に出さなくらいの分別はぼくにだってあった。「写真なら撮ったぞ。現像したら見せてやつからな」

野際の爺さんがカメラをひけらかしながら言った。相当な年代物らしく、何か事あるごとに引っぱり出してきては自慢をしている。

本人曰く、生まれた時から一緒だったらしいけれど、写真撮影が趣味になったのは退職後からの噂だった。

「うわ、ボロツちいカメラだな。写るのかよそれ」

親父が茶茶を入れた。野際の爺さんがカメラ自慢を始めそうになると必ず言って、話の腰を折っている。長い自慢話を聞かないですむのは有り難いけれど、もっと穏便な言い方つてもものがあると思う。これでは喧嘩を売っているようなものだ。

「莫迦言うんじゃねえ。柚賀原の小倅が、こせがれ名機と名高いこいつに撮れんものなぞないわ。ヒーリッツ賞ものも余裕じゃ」

もしかしてピューリッツァー賞のことだろうか。あれは新聞報道の賞であって、普通の写真は対象にはならないはずだ。取り敢えず知ってる賞を（間違えているとはいえ）言ってみただけなんだろうな。

野際の爺さんは怒ったような口調ではあるけど、顔は嬉しそうに歪んでいた。まるで久しぶりに遊び道具を手にした子供のようだ。

「楽しみに待ってるからな。絶対に見せてくれよ」

「おう。見たくないとほざいても見せてやるから待つとれや」

野際の爺さんは相変わらず威勢がよかった。口は悪いけど、気さくで面倒見の良い爺さんだ。出戻った親父と普通に接してくれた、村では希有な人だった。

そうこうしているうちに人が減り始め、夏音さんと親父も「早く家に入れよ」と言い残して行ってしまった。

ぼくも家に帰ったのだけれど、深耶音が呆然と洋館を見つめて動かないのが気になって付き合っていた。

「どうかした？ ボケつとして。……ははあ、さては怖いんだ。確かに薄気味悪い洋館だよなあ」

話しかけても返事が返ってこなかった。聞こえなかったのだろうか。深耶音は怒っている時でも無視するような奴じゃないからな。深耶音の顔を覗き込んでみる。ぼくが覗いていることを気付いていないのか、それとも気にもしていないのか、真面目な顔付きをしながらひたすらに洋館を見つめていた。

何か見えるのだろうか。深耶音の視線を追って洋館を観察してみるけれど、別に変な箇所は見当たらない。多少は薄気味悪いけれど、それは大きな屋敷が明かりも点けずに佇んでいれば普通に感じてしまう感情に違いない。やっぱり只の建物でしかなかった。

もしかして外見ではないのだろうか。しかし、半日で建ってしまったこと以外はおかしな所はない。第一、この屋敷について知っていることは皆無に等しい。このずっと空き地だった場所の所有者すら知らなかった。それでも無理に見付けるとしたら、こんな田舎にわざわざ大仰な方法で洋館を建てたことくらいなものだろうか。

何度見直しても洋館の存在自体に違和感はなかった。西織村には更に大きな九條屋敷が点在しているし、九條の関係者が洋風な別荘を建てている。なんでも先々代の当主が西洋文化に気触^{かふ}れてしまい、殆どの建物を西洋風に建て替えてしまったそうだ。だから、今更洋館が増えたところで別に珍しいとも思わなかった。

だからだろうか、ぼくには深耶音が真剣に観察する理由が思い付けなかった。

「……みか音……知ってる」

考えを巡らせていると、深耶音がぼそりと呟いた。

「えっ、今なんて？」

「わたし、見たことあるよ。この家知ってるよ」

「へえ、どこか旅行に行った時にでも見たのかな」

凝った意匠の建物だから印象に残りやすいだろうな。もしかすると有名な建築家によるデザインなのかもしれない。だとしたら建築

系の雑誌に似たような洋館が載っていても不思議じゃない。なにせ家の居間に行けば親父が読み散らかした建築系の雑誌が何冊も転がっている。遊びに来た深耶音が熱心に読んでいるのを見たことがあった。

「ちがうよ、ここだよ。この場所で見ただよ」

「はあ？ 何を言ってるんだよ。建ったのは今日なんだから、見てるわけないって」

「うん……そう……だよ」

深耶音は納得できない様子で洋館を見つめている。その表情から察するに、何かを思い出しそうなのに、どうしても思い出せなくて気持ちが悪いつた所だろうか。

「家の本で見たんだって。そっくりなのが載ってたから、それと混同してるんだよ。気にすることないって」

「うん……そうだよ」

深耶音は洋館から視線を外して周りをぐるりと見回すと、それでモヤモヤとしたものが吹き飛んだのか、いつもの笑顔を浮かべて言った。

「うん、うん。気のせいだよ。気のせい」

「そんなことより、腹へったよ。今日の当番は親父だから期待できないけど、今ならなんだって食べられる気分だ」

「瑞希ちゃんの料理も期待できないよね。なんだったらみか音が作ってあげるよ」

「あまり甘やかさないでよ。男しか居ないんだから料理くらいは出来ないと」

勿体ないなと思いつながら、適当な理由を付けて断った。せっかく夏音さんが早く戻っているのだから、家族で食事をするべきだと思つたからだ。そのことを深耶音も察したらしく、何も言わずに引き下がった。

さて、これで今日の夕飯を親父が作るのが確定したわけだけれど、同時に悲惨で無惨な夕飯になることも確定してしまった。

西織村には名ばかりのラーメン屋と、名ばかりのコンビニしかなくて、需要のない弁当などは一切置かれてはいなかった。ここでは料理くらい出来ないと健康で文化的な最低限度の生活すら営めないのだった。

越してきた当初は爺さんが作っていたのだけれど、爺さんが亡くなってからは悲惨なものだった。毎食がカップ麺やレトルト食品のオンパレードで、手作りのおかずらしい物といえばスーパーで買ってきたコロッケを切ったものくらいだった。

しかも村のお店で売っている商品の種類が都会よりも圧倒的に少なかった。カップ麺は三つの銘柄しかなくて、しかも全てが醤油味だった。レトルト食品なんてカレーしか置いてないし、しかも置いてあるのは甘口だけ。ローテーションを工夫しても代わり映えのない食卓に嫌気がさし、自炊を選択するのに三週間は掛からなかった。食に拘りのないばかりにだって限度というものは有るのだ。たまには魚や野菜だって食べたいのだ。

そんなわけで自炊を決意した二人ではあったのだけれど、そもそも基礎知識がない者に満足な料理が作れるはずもなく、早々に高すぎる壁に打ちのめされたのだった。どんな料理を作ったのかは聞かないで欲しい。思い出したくもないし、無理に思い出すと吐いてしまいかもしれない。

とにかく、親父は焼き肉ばかりだし、ぼくは麺類ばかりだ。圧倒的に野菜が不足しているのは分かっているけど、好きじゃない材料を選んで料理が出来るほど、ぼく達親子は人間ができてはいなかった。だから柚賀原家の食卓にはバランスなんて考えられてもない料理が並ぶことになる。しかも不味いというおまけまで付いて。

今ではそんな現状を見かねて、深耶音が作りに来てくれている。深耶音はぼくと親父が越してくる前から爺さんと一緒に食事を取っていた。帰りの遅い夏音さんの代わりに、家の爺さんが預かって面倒を見ていたのだ。だから爺さんが死んだ時の深耶音の落胆振りは凄まじかったのだけれど、立ち直ってからは頻繁に料理を作りに来

てくれるようになった。

「ほんと親父が健康を保っていられるのは、偏ひとえに深耶音のおかげだ。いくら感謝の言葉を並び立てても足りないくらい感謝している。

しかし、いつまでも好意に甘えているわけにはいかないだろう。巢立たない小鳥がいないように、ぼくも簡単な料理くらいは出来るようにならなくては。と思い、深耶音に教わること二年あまりで簡単な料理は作れるようになった。パスタと卵焼きなら普通に食べられるはずだ。他の料理は……考えたくないな。

「そっか。でも明日の夕食には来てね。母さんも楽しみにしてるんだよ」

日曜日になると柚賀原家と向坂家の合同夕食会が開かれる。合同とはいっても、柚賀原家が向坂家にご馳走になりに行くだけで、別にパーティを開催しているわけではない。

「絶対行くよ。親父なんか昼飯抜くほど楽しみにしてるんだぞ」

「それは健康に悪いよ。でも喜んでくれてるなら嬉しいな」

微笑む深耶音を見ていると、何となく照れくさくなった。走って逃げたい気持ちを抑え付け、自然を装って歩き出す。

「それじゃ、またね」

「うん、まただよ。ちゃんとお布団掛けて眠るんだよ」

深耶音は余計な一言を残し、うちの敷地を横切って裏手の自宅へと消えていく。

それを見送ったぼくは、今夜の夕食が食べ物であることを願いながら玄関をくぐった。

消し炭のような鮭を平らげ、お風呂に入っただ後、ぼくは布団に横になっていた。ジワジワと胃が痛んできたからだ。

原因はやっぱりあの鮭なんだろうな。珍しく焼き魚を選んだチャレンジ精神は認めるけれど、表面が黒こげで、中身がレアよりもレアなのは焼き魚と認めるわけにはいかない。刺身に出来るほど新鮮なら良いけれど、この辺りで焼き魚用に売られている物に、そんな期待をしてはいけない。そんなことをすれば、過剰な期待に耐えられなくなった切り身はのし掛かる重圧に耐えられなくなって家庭内暴力を振るうようになってしまっただろう。

取り敢えず、フライパンで焼くのは良いとしよう。魚用グリルを使うのが面倒なときは、ぼくもよくやる手だ。クリルで焼くのは良いけれど、焼いた後の片付けが面倒なのだ。

でも、焼く前から醤油を掛けてしまうと、その後どうなってしまうかはぼくだって知っている。そう、焼き上がる前に焦げて真っ黒だ。それなのに中に火は通らずに生のままになってしまう。

……ああ……、残せばいいのに食べ物粗末に出来ない性格が恨めしい。

後悔の念に蝕まれていると、大きな足音を立てながら親父が廊下を歩いて近付いてくるのに気付いた。親父の足音はドカドカと煩いのだ。

「おい、瑞希。胃薬持ってきてやったぞ。……なんだ明かりも点けないで」

親父が襖を開けて入ってくる。もちろんノックなんてしない。

「点けなくていいよ。もう寝るから。後で飲むから、机の上にも

置いていて」

「なんだあ。随分早いじゃねえか。ゲームやろうぜ。ゲーム」

「もう飽きたよ。面白そうなのが出るまでいいや」

「そうか……」

親父は何か言いたそうな素振りを見せるが、結局何も言わなかった。黙り込んだ親父を訝しく思い、表情を窺おうとするけれど、廊下の明かりが顔に影を作って隠していた。

「じゃあ、おやすみ。布団掛けて寝ろよ。風邪引いても学校行かすからな」

もしかして、周りからは布団を掛けないで寝ていると思われるのだろうか。そんなことを思っていると、布団の上に薬の瓶が落ちてきた。親父が投げて寄越したのだろう。

「親父、……ありがとう」

親父は一瞬だけ動きを止めたけれど、結局は何も言わずに襖を閉めて戻っていった。

折角なので胃薬の錠剤を唾で呑み込み、水を持ってこない気の利かなさが実に親父らしいと納得する。

開け放たれた掃き出し窓から空を見上げると、そこには星空が広がっていた。

空を覆い尽くす星の光。月の無い夜にだけ魅せる星々の饗宴。

こんなにも素晴らしい眺望を前にしては、眺める以外にすることはないだろう。心が奪われるとは、こんな状態を言うのだろうか。

思えば、この星空を見てからかもしれない。あまりテレビゲームを面白く感じなくなったのは。身近に別の世界が広がっているのを知ったとき、画面の中にしかない狭い世界に魅力を感じなくなってしまったのだ。

それは遊びにしてもそうだった。鬼ごっこや隠れん坊の楽しさを知ったとき。野球やサッカーの楽しさを知ったとき。どんどんテレビゲームに魅力を感じなくなっていった。

ぼくは低次だと莫迦にしていた遊びが、この上なく楽しい行為な

のだと知った。そして、煩わしいだけだった友達が、掛け替えのない仲間であることを遊びが教えてくれたのだ。

親父は山奥で何も無い田舎に家移りしなければいけなかったことを、今でも引け目に感じているらしい。初めて聞かされたときからずっと、ぼくは反対しつづけていたからだ。

この村に来るまでの一ヶ月間は徹底して無視を決め込んだ。この家に越してきたときも十日間は部屋に閉じこもった。出てくるのはトイレと食料をあさるときだけ。

今考えると、何故あそこまで頑なに反対したのかと思う。でも、ふて腐れもするだろ。親の都合で住み慣れた都会を離れ、不便極まりない田舎に連れてこられれば。

でも、今は感謝していたりする。ぼくはこの村に来てから多くの今を手に入れた。棄ててきた過去があまりにも小さすぎて、記憶に残らないのではと思わせるほどに。

そんな機会を与えてくれたのは親父だ。ぼくも親父も望んで越して来たわけではないけれど、今はとても感謝している。そんなことを口に出して言うのは恥ずかしいので絶対に言わないけれど、本当に感謝しているんだ。

ぼんやりと星空を眺めていると、虫の声に混ざって何か大きな何かが移動しているような音が聞こえることに気が付いた。はたして動物だろうか。

しかし村には野良猫も野良犬もいない筈だ。野生化したら困るからと、見付け次第捕獲してしまう。猿も猪も鹿も村には近付いて来ないと聞いた。現に隣のうぢまち鯔町（現在は楠目市に併合されているけれど、未だ鯔町と呼んでいる人が多い）では熊や猿が何度も目撃されているのに対し、山奥と言ってもいい場所にある西織村には一度たりとも現れた記録が残ってはいないらしい。もつともこの話の情報源は誠人なので、どこまで信用しても良いのかは分からない。

月の無い夜は空を星で満たし、地を漆黒に染め上げていた。星の明かりに慣れてしまうと足元が暗闇に覆われ、暗闇に慣れてしまう

と星が眩しすぎて空が見えない。

星の仄かな光では辺りを過不足なく照らすには弱すぎて、逆に闇を際立たせて多くの造形物を隠してしまう。

そんな世界にひとつの闇が蠢いていた。闇は仄かとはいえ光が燦爛と輝く世界にあつてなお闇として揺らめいていた。

漆黒よりも暗い闇がそこにはあつて、その闇はゆつくりと近付いて来ていた。

闇は恐怖だ。何も見えない。何も感じられない。無機物の持つ冷たさ。何物をも許容し、全てを否定する。逃げ出したい衝動に駆られても、実行に移す命令を脳が発してくれない。出来たことと言えば、ゆつくりと上半身を起こすことだけだった。

「こんばんは」

闇が声を発した。凜とした声。透き通るような、冬の空気にも似た響き。それでいて、どこか幼さを感じさせるような声音だった。

闇が晴れて声の主が姿を現した。それは同い年くらいの少女だろうか。背後の星明かりが邪魔をして、顔を確認することが出来ない。それにしても、女の子がこんな時間のこんな場所で一体何をしているのだろう。

「こ、こんばんは」

平静を装って返答したけれど、思わず吃ってしまった。少し恥ずかしい。

「貴方も星を見ていたの？ 月の無い星空って綺麗よね」

少女が妙に大人びた口調で話しかけてくる。もしかすると少女などではなく、背が低くて声の若い女性かもしれない。

「えっ、ええ。綺麗ですね」

思わず余所行きの声で答えてしまった。どうやら、本気で動揺しているようだ。落ち着け、落ち着くんだ、ばく。

「そちらにお伺いしても、宜しいかしら」

「えっ、えっと、どうぞ」

不思議と断る気持ちが湧いては来なかった。それどころか、わざ

わざと確認されたことに寂しさのような気持ちを感じていた。

さつきは暗闇の中を人が近寄ってきたから動揺しただけだ。正体さえ分かれば動揺する必要はないし、何よりかつこ悪いではないか。立ち上がって蛍光灯の紐を引っ張る。明かりが点くと、ゆっくりと窓際まで近付いてきた少女の姿が鮮明に浮かび上がった。

そこに居たのは、とても美しい少女だった。純白のワンピースを纏い、さらりと広がった黒髪が膝の辺りまで伸びていた。白と黒のコントラストがそれぞれの持つ長所を高め合い、神秘的と言っても大袈裟ではない輝きを放って見えた。

明かりを受けて艶を放つ黒髪の幾筋が純白の衣装と白みを帯びた肌に絡み付き、その髪をかき上げる姿を見ているだけでときまぎししてしまう。それに、その仕種が何となく懐かしいような気がして、つい見とれてしまった。

「好きなの？」

「えっ！」

髪をかき上げる動作に見とれていたのを見透かされたのかと思い、頭の中が真っ白になる。

「ずっと見てたから、星が好きなのかと思ったの。違うのかしら」

「あつ、ああ、星ね。うん、結構好きだよ。ずっと見ていても飽きないし」

「そうね。時折、時間を忘れて見とれてしまうわ。

ねえ、腰を

掛けても良いかしら」

「ど、どうぞ」

少女は返事を聞くと、背中に流していた髪を前方で一本の束にまとめ上げてから、申し訳程度の縁側に腰掛ける。またしても髪を纏める行為に視線が釘付けになってしまった。

ぼくは一体どうしてしまったのだらう。ただ髪を纏めただけじゃないか。こんなにときまぎしなくちゃいけない理由なんてない筈だ。「初めまして。私は神座葵^{かむくろあおい}。葵と呼んでくれると嬉しいわ。名字で呼ばれるのは好きじゃないの。語呂が悪のなもの。それと、敬語な

ど使わずに普通に話してもらえるかしら。私も気を遣いたくないもの」

注文の多い自己紹介だった。

「分かったよ。ぼくは」

「今日の引っ越しは驚いてもらえた？」

自己紹介を返そうとしたけれど、その隙を与えてはもらえなかった。せっかちな性格なのだろうか。それとも、ぼくの名前なんかに興味はないって意味だろうか。

「引っ越しって、隣の洋館のこと？」

ぼくが知っている最近の引っ越しは隣の洋館以外にはない。但し、あれが引っ越しと呼べるのならだけれど。

「そうよ。家ごと引っ越してきたの。まったく困ったものよね、お父様の思い付きにも。唐突に家が建っていたら、皆さん驚くだろうと仰って」

そりゃあ、驚くだろ。昨日まで空き地だった場所にいきなりあんな大きな建物が建っていたら、大抵の人は驚くに決まってる。

「でも凄い発想だね。家をヘリコプターで移動させるなんて」

「そうね。発想だけは凄いわよね。やらされる周りは迷惑でしょうけれど」

葵は嬉しそうに微笑む。可愛いと言うよりも美しいと言った方が適切だろう。ちょっとドキッとしてしまった。

「家ごとってことは、葵さんも吊されて来たの？」

「『さん』は要らないわ。葵でお願い。堅苦しくなってしまうのは嫌なもの」

葵の言葉遣いが一番堅苦しい気がするけれど、きっとこれでも気軽に話しているつもりなのだろう。育ちが違くと堅苦しさの基準も違ってしまうらしい。

初対面で馴れ馴れしいのもどうかと思ったけれど、どうやら葵は気にしないタイプのような。あまり気にしないで気軽に話すという。

「それじゃあ、葵も吊されて来たの？」

「まさか。それ程無謀ではないわ」

葵は楽しそうに微笑む。美人が微笑むと何かを企んでいる様に見えるけれど、葵の微笑みは凶悪に可愛いく見える。先程からの大人びた表情からは想像も付かないほど子供っぽくて無垢な笑顔だった。

「それで、葵はこんなに遅い時間に何をしてたの？」

「こんなって、まだ九時も回っていないわよ。そんなに遅い時間でもないでしょ」

「それもそうか。西織って夜が早くてさ。七時を過ぎると誰も出歩かないんだよ。店とか開いてないから、八時過ぎると深夜みたいになっちゃうし」

西織に来たばかりの頃は夜の暇な時間を潰すべく、何か暇を潰せるものを求めて彷徨い歩いていた。そして夜を構成している質が、今まで住んでいた場所とは違いすぎることに愕然としたものだった。

まず、七時過ぎに開いているお店は飲み屋以外にはない。その飲み屋にしたって華やかな喧騒とは無縁の小さなお店だった。コンビニの名を掲げている中本屋ですら七時には閉まってしまう、全然コンビニエンスじゃないコンビニしかなかった。

街灯などは主要道路と公共施設にしか建っていないので、懐中電灯を持たずに出歩くのはとても怖かったりする。前に住んでいた場所なら十時前に閉まる店は少ないし、外灯などは何を照らすつもりなのか理解に苦しむような場所にまで設置されていた。

「だから星を眺めていたの？ 他にやることもないから？」

「うん、そう。うちってさ、ケーブルとか入ってないからチャンネルが少ないんだ。しかも映り悪いしさ。つまんない番組しか映ないんじゃないってかもしれないだろ」

「ケーブルって？」

「ああ、ケーブルテレビだよ。隣の町からテレビの線を引っ張ってきてるんだって。凄いらしいよ。60チャンネルもあって映りも良いし、インターネットだって出来るんだってさ」

「それは楽しそうね。なぜ入っていないの？」

「親父がお笑いを嫌ってるんだよ。特に罰ゲームとかが嫌いらしくて、あんなものを見るならゲームでもやれなんて言うんだ。ネットもやってみたいけど、パソコンなんてうちの家計じゃ高すぎて買えないしさ」

「うちは貧乏ではないけど余裕があるわけでもない。毎月カツカツな生活だ。だったら家具の値段を上げれば良さそうなものだけけど、親父の信念が『良い物を安く』だから、仕事で殺到するようになった今でもたいした収入にはなっていない。」

「大体さ、パソコンなんてゲームとネットくらいにしか役立たないくせに高すぎるんだよ。簡単だとか言つといて、すつごく難しいしさ。あんなの憶えるくらいなら、他のことをやった方がいいよ」

「何事を為すにも最初は難しいものよ。慣れてしまえば難しい事は無くなっていくわ。少しでも興味があるのなら、諦めて拒否する前に挑戦した方が良いのではないかしら」

「がんばって憶えても更に難しい問題が次々と増えていくんだ。そんな面倒臭いよ」

「そうね。難問は決して無くなりはないわ。でも、それが生きる証なのではないかしら」

「そんな大袈裟な」

「何事も大袈裟な方が丁度良いのよ。諦めて何も為さないのは死んでいるのと同じことではないかしら。生きている意味が見出せないのなら、それは死にかけているからよ。だから人は意味を求めて生きていくの。あくまで私の仮説だけれど」

「何だか話がかみ合っていない気がする。ぼくはパソコンのことを言っているのに、生きる意味などと哲学的な話をされても付いていけない。」

葵は右腕に着けている時計を見やると、優雅な動作で立ち上がった。束にしていた髪がふわりと解けて、蛍光灯の光に輝きながら広がった。

「そろそろ門限みたい。早く帰らないと希更に怒られてしまうわ」

「帰るなら、送ろうか？」

「ありがとう。でも大丈夫よ。お隣ですもの」

微笑む葵の瞳が真っ直ぐにぼくを見つめてくる。話し相手の目を見るのは礼儀なのかもしれないけれど、ぼくは恥ずかしくて駄目だった。相手の口元を見ていれば視線が合っているように誤魔化せる。だから、このときも僅かに視線をずらしていた。それに気が付いたのか、一瞬だけ憂いの表情を浮かべた気がしたけれど、もしかしたら見間違えかもしれない。

「また、お話に来てもいいかしら」

「いつでも来てよ」

「ありがとう。それではお休みなさい。またね、瑞希」

「うん、おやすみ、またね」

葵はゆっくりと振り返り、ゆったりと歩き出す。決して動作が緩慢なのではなく、これが優雅な振る舞いというやつなのだろう。

突然引き留めたい気持ち湧いてくるけれど、引き留める言葉が出てこない。掛ける言葉が思い付かなかったのと、引き留めなければいけないと思った理由が分からなかった。どうしてそんな気持ちが湧き上がったのか、自分のことながら困惑してしまう。

蛍光灯の照らす光の中から葵の姿が消える。まるで闇に呑み込まれてしまったかのようなだった。

もちろん本当に消えたわけではない。部屋の明るさに慣れてしまった角膜ではほんの二、三メートル先であっても像を結ぶことが出来ず、光の届く範囲以外を隠してしまう。

葵の消えていった先を未練がましく見つめてしまう。戻ってくる筈もないのに。

何かが引っ掛かっていた。何か、大切なこと。でも心当たりはない。諦めて考えることを止めたとき、ふと疑問が湧いてきた。

「……あれ？ そういえば、葵に名前を言っただけ？」

言っただような、言っていないような。良く憶えてはいないけれど、

きつと言ったのに違いない。だって、言っていないなら知っている筈がないのだから。

何だか考えるのが面倒臭くなってしまった。窓を閉じて明かりを消すと、布団に寝転がって空を見る。ガラス越しに見る星の瞬きも、やっぱり綺麗で飽きなかった。

いつの間に治ったのか、胃の痛みが消えていた。

2 - 1 九條佐保

二日目

1

「瑞希ちゃん、起きてえ〜！」
ドカツー！」

「うぎゃあああああー！！！」

突然の衝撃と圧迫感に驚いて、無様に悲鳴を上げながら目を覚ます。慌てて確認すると、お腹上に深耶音が跨っていた。

「深耶音……、お前は何をしてるんだよ。いや、何してるのかは分かってる。何をしたのかも」

深耶音は満面の笑みを浮かべながら、お腹の上で暴れ出した。

「分かってるなら良いじゃない。ほら、起きよ。起きて遊ぼうよ」

「ぐほっ、がはっ、ぐえっ、やっ、やめっ、」

「起きて、起きて、起きてえ〜」

「おっ、起きられるかぁ！」

全力で上半身を起こし、倒れた深耶音を足で挟んで横に投げ飛ばす。勢いよく転がった深耶音は、ゲーム機やソフトを蹴散らしてテレビラックに激突した。ラックの中にも積み重ねて置いてあったゲームソフトが裏側に崩れ落ちてしまふ。ああ、あそこは埃だらけなのに。

「こら、ゲーム機が壊れてたら弁償だぞ。ソフトもきれいにして元の場所に戻しておけよ」

「うつつ、それはみか音のせいなのかなあ」

不平を言う深耶音を無視して時計を見ると、長針と短針が真上を指し示す直前だった。休みとはいえ寝過ぎたかも知れない。いや、確実に寝過ぎだ。寝過ぎると脳細胞が死んじゃうんだぞ。……本当かどうかは知らないけど。

「いいか、お前に一つ言っておきたいことがある」

ピシッ！ と人差し指を突き付けて、ぼくは言った。

「わっ、何かな。閑白宣言？」

「ちやうわ！ 言ったよね、打撃で起こすなって」

「打撃じゃないよ。乗っただけだよ」

「勢いよく乗れば十分打撃だって。ほら、着替えるんだから出てっ
て」

納得のいかない様子の深耶音を無視して、パジャマ代わりのトレーナーを脱ぎ出す。深耶音が出て行くまで待つなんてことはしない。もちろん深耶音も気にした様子もなく、簡単に散らかったゲームソフトを積み上げて立ち上がった。

「じゃあ、あひるご飯作るね。ちよつと時間掛かるから、ゆっくり着替えてていいよ」

「アヒル？」

「朝も兼ねたお昼ご飯だから、あひるご飯」

それはどうだろう。別の料理にしか聞こえないんだけど。

「……美味しく、お願いします」

もちろんだと言いついて残して深耶音が部屋を出て行く。やれやれと溜息を吐きながら着替えていると、窓に映る景色がいつもとは違うことに気が付いた。昨日の朝には無かった朱い洋館。改めて白昼の明るい時間帯に見ると、真紅ではなく程よく薄い朱色なのだと分かる。

この光景を知っている様な気がする。そんなはずはないのに。

昨日だつてそうだ。何故か葵とは初対面な感じがせず、警戒や抵抗感もなくうち解けていた。窓辺とはいえ初対面の人を部屋に入れるなんて考えられない。いつもなら絶対に拒んでいたはずだ。それを素直に招いてしまったのは、あの時感じた既視感によるものだ。そう、あの時感じた気持ちは、五年前に西織に越してきた時に感じた感覚と同じだ。それは懐かしさにとても似た感覚だった。

途中でトイレと洗面所に寄ってから居間に辿り着くと、甚平をだらし無く着崩した親父が座椅子に座って新聞を読んでいた。寝癖でボサボサになったままの頭を見ると、どうやら親父も起きたばかりのようだ。

「親父、仕事は休みなのか？」

自営業の親父には決められた定休日などというものはなく、休みたいと思つた時が定休日だった。仕事さえあれば休日にも働くし、暇ならば平日に休んだりもする。

周囲からは自由奔放な仕事だと思われるけれど、自由に休めるということはそれだけ自己責任が重いということだ。

「いや、午後から打合せだ」

親父は庭に工房を構えて家具造りをしている。今は椅子と筆筒だけを造つて卸しているけれど、注文さえあればどんな家具でも引き受けている。打合せを必要とする注文は得てして高額になる為、量産品よりも割が良い。しかし、割の良い仕事が来たからといって、サボっている余裕なんて無いはずだ。

無名の親父が作る家具の値段など高がしれているので、ある程度まとまった数を作らなければ生活費すらも稼ぎ出せないのだけれど、物が物だけに大量に作れる代物ではない。だから休み無く造り続けなければ、食費を切り詰めなければならぬほど生活が切迫してしまふ。それに安定して売れてくれれば良いのだけど、全然売れない時があつたりすると、在庫が増えるのに対して食卓のおかずが一品ずつ減っていく。

最近では僅かとはいえ人気が出てきたのか、予約まで入るように

なっていた。安定して売れるようになったのは良いのだけれど、今度は捌ききれない量の注文に忙殺されるようになった。価格を上げて受注量を調整すればいいのに、当の親父は価格を上げるのに反対するのだ。だから工房の動かない日は皆無で、休みたくても休めないのが現状だ。親父は常々、決まった休みがある仕事が羨ましいと洩らしている。

「仕事はどうしたんだ。もしかして体調でも悪いのか」

「キャンセルしたんだよ。全部」

「キャンセル？ 何を全部キャンセル？」

意味を理解することができなかった。

「一ヶ月先まで入っていた注文を、全部キャンセルしたんだ」

注文をキャンセルって……。まさか販売業者との契約をキャンセルしたって言うているのだろうか。

いやいや、きっと聞き違いだ。だって、こっちから契約を破棄なんてしたら、契約金の三倍にもなる違約金を払わなければならないのだ。来月の生活費すらままならないのに、そんな大金を用意できるはずがない。

それに失うのはお金だけではない。仕事を請け負っておきながら投げ出してしまうなんて、今後の信用に係わる大問題だろう。下手をすると、うちの商品を扱ってくれなくなってしまうかも知れない。「どうした、ポケットとして。ああ、ポケットとしてののはいつもか。」

いいか、キャンセルだ。解約、反故、解消だ」

「言葉の意味は分かっているよ。行動の意味が分からないだけで。それって働かないってことか？ 無収入に逆戻りってわけか？」

工房を構えてからの一年間は注文が一件も来なくて、その日の食べ物にも困っていた。向坂一家からの援助がなかったら、ぼくと親父は餓死していただろう。あのひもじい日々が戻ってくるのかと思うと、目眩がしてふらついてしまう。

「ふっふっふっ、安心しろ愚息よ。父もそこまで愚かではないぞ。実はな、新たな注文が入ったんだ。しかも大口だぞ。いつもの業者

を仲介しての依頼ってことになってるから違約金も払わなくて済むぞ。午後はその打合せに行ってくるのだ」

「な、なんだよ。また貧乏に逆戻りかと思って心配したたる」

ひもじい思いをしないで済むのなら大口でも小口でも構わないのだけれど、一時の儲けの為に今までの信用を失わないですんで良かった。

「わっははは、更に驚け愚息よ。今度の仕事は豪邸を一軒分まるまるだ」

「えっ、ほんと！」

これで合点がいった。豪邸と呼べるほど大きな屋敷の中を、自分の作った家具でコーディネートするのが、この仕事を始めた時に掲げた親父の夢だった。それをたった五年で実現できるのだから、他の仕事を全部断ってしまうような無茶な仕事を請け負ったのも納得ができる。このチャンス逃したら二度と無いに違いない。

「うはあゝ。親父もやっと認められたんだなあ」

「おおよ。地道な努力が実を結びやがったぜ。よし、この嬉しさを表現する為に、村中を踊りながら駆け回るか！ 行くぞ！ 愚息よ」

「絶対行かない。で、どこの奇特定の客が頼んできたの？」

「そんな蔑んだ目で父さんを見るなよ。それがな、お隣なんだ」

「隣って、昨日越してきたばかりの？」

「おおよ。屋敷中の家具を全部新調するってんで、気鋭の家具職人である俺様に頼んできたって訳だ。その数、全十室分。居間や客間に寝室、台所、更に使用人部屋まで全ての家具を俺様色に染められるんだぜ。どうだ、遣り甲斐ありそうだろ」

「すっげ〜。でも、それってデザインから起こすんだろ。何ヶ月掛かるんだよ」

「下手したら年単位かもしれんな」

「まさか出来上がってからの支払いじゃないだろうな。その間の生活費を賄える蓄えなんて、これっぽっちも無いからな」

親指と人差し指の間に隙間を作り、これっぽっちを強調させる。

親父の夢を応援したいとは思っけれど、先立つ物がなければ生きてはいけないのだ。一ヶ月程度なら何とかなるけれど、二ヶ月は流石辛い。しかも、その期間で終わるとはとも思えない。安価で高品質に拘り続けた結果がこれだ。喜ぶのは客ばかりで、ろくに貯金も出来やしない。久我原家の生活は常にかつかつなのだ。

「安心しろ愚息よ。一ヶ月毎の出来高払いつてことになっている。精算日まで納品した家具の金額があれば余裕だろ」

なるほど。全部が終わってからの請求じゃないのか。うちはいつも出来高払いで契約を結んでいたから、今回もそうなのかと思ってしまった。

「なんだ。それなら大丈夫そうだな。で、どのくらいの予算でやれって？」

「それがな、幾らでも良いんだと。俺の裁量で必要な家具を作って、勝手に値段を決めてくれってよ」

「なんだそりゃ。大雑把だなあ。昨日会った子はきっちりしてそうだったけどな」

「あん？ 昨日会ったなあ。いつ会ったんだ。寝るの早かったんだから夕方か」

しまった。夜に窓辺で会ったなんて言ったりしたら絶対にからかわれるに決まっっている。ここは誤魔化しておかないと……。

あれ、そういえば親父はいつ注文を受けたんだ？

今の時間に甚平で寛いでいるということは、少なくとも今日聞いたのではないだろう。ということは、ぼくが部屋に閉じこもってからだろうか。

そんな事を考えていたら、深耶音が昼飯を運んできた。

「さあ、美味しいあひるの時間ですよ。卓袱台の上を片付けてくださーい」

ぼくと親父は言われたとおりに、いそいそと卓袱台の上に載っていた雑誌やリモコンを片付ける。片付けといっても壁際に放り投げただけだけ。

「はい、めちゃくちゃ美味しいお蕎麦ですよ」

ドンツ！ と、大きなザルが卓袱台の真ん中に置かれた。一抱えもありそうなザルには大盛り過ぎる量の蕎麦が盛りつけられていた。一体何十人分あるんだといった量だ。

「え、また蕎麦かよ。いいかげん飽きた」

ぼくは不平を言った。別に蕎麦が嫌いだからではなく、本当に飽きているからだ。

「飽きないよ、飽きっこないよ。こんなに美味しいんだよ」

どんなに美味しい料理でも二日周期で食べていたら普通は飽きると思う。それが味の変化がない蕎麦では尚更だ。

まったく、深耶音の蕎麦好きにも困ったものだ。不平を言っても蕎麦を出してくるのだけは止めはしない。そんなに好きなら自分だけで食べていればいいのに。

もちろん蕎麦は買ってきた物ではなく、自分で打ったものだ。しかも蕎麦打ちだけではあきたらず、自分専用の畑で蕎麦そばむぎの栽培まで行っている。

「さあ、食べて、食べて。深耶音謹製の麺汁も調製済みだよ」

しかも麺汁まで拘っていた。

「麺汁なんて市販品で十分だってば」

「分かってないなあ。分かってないよ。お店で売ってるのは、ただの味付き醤油なんだよ。美味しく食べるのには鮮度が足りないんだよ。それにね、蕎麦の味は碾いた時の温度や湿度で違っちゃうんだから、ちゃんと汁も調整してあげないと美味しく食べてあげられないんだからね」

ぼくには理解できない拘りくだわがそこにはあった。その無意味にも思える拘りは、もう職人の域にあると言っても良いんじゃないだろうか。

「それは何回も聞いたよ。御託はいいから、伸びる前にさっさと食べよう」

「さっさと食べないで、味わって食べてよ」

深耶音の発言は無視して、吐き気を催すほど山盛りの蕎麦に箸を伸ばす。

……うん、美味い。流石深耶音だ。これを食べたら他の蕎麦なんて食えた物じゃない。

でも飽きた。とことん飽きた。美味さを超越して飽きていた。

蕎麦なんて一月に一度くらいで十分じゃないだろうか。幾ら美味しくて所詮は年寄りの食べ物なのだ。同じ麺類ならラーメンや焼きそばの方がいいに決まっている。

「あれ、深耶音ちゃんには食べないのか？」

親父が深耶音の分の食器が用意されていないのを見取って尋ねる。そういえば二人分の用意しかされていなかったな。山盛りにされ過ぎた蕎麦を見て、深耶音も食べるのだと思い込んでいたから気付かなかった。

「みか音は家で食べてきました。お母さんと。だから遠慮しないで全部食べちゃってくださいね」

「いやいや、無理だから。どう見ても五人分はあるから」

ぼくが真つ当なことを言うと、不服そうな表情で深耶音が言い返してくる。

「えーっ！ この前『蕎麦なんか食った気がしない』って言われたから、今回は多めに作ったんだよ。これだけあれば食べた気になるかなって思ったのに」

「それは意味の受け取り方がちがうから。あれは蕎麦自体を食べたくないってことで、量が少ないって問題じゃないよ」

何を隠そう、ぼくは麺よりもお米が大好きなごはん党員で、白米を食べないと食事をした気分にならないのだ。

「諦める愚息よ。深耶音ちゃんの天然さを見誤ったお前の責任だ」
遠回りに酷い事を言っている気がする。

「親父……深耶音の料理欲しさに、息子を売る気か」

親父の魂胆は見え見えだ。深耶音の味方をしておいて、ポイントを稼ぐつもりなのだろう。深耶音を煽^{おた}てると、おかずが少しだけ豪

華になるからな。その代わりに機嫌を損ねた方のおかずは一品少なくなったりする。

「ふんっ。料理一つ満足に出来ない愚息で良いのなら、幾らでも売っぱらってくれるわ。俺様は美味しいご飯を食いたいんだ」

「言っただな。自分を棚に上げて言っただな。自分だって料理下手なくせに。あゝあつ、こんな親父より、夏音さんの息子が良かったなあ」
「吐かせ。夏音の息子の座は渡さねえ」

「親父も息子狙いなのかよ」

くだらない言い争いだと思いつつも売り言葉に買い言葉、言い返さずにはられない。

「はい、そこまでです。早く食べないと伸びちやいますよ。ケンカは食べ終わってからにしてくださいね」

見るに見かねた深耶音が仲裁に入るけれど、止める理由はあくまで蕎麦だった。蕎麦さえ伸びなければ、ぼく達のいがみ合いなどどうでも良いのだろう。

気付けば二人とも食べながら言い合うものだから、卓袱台の上が随分と悲惨なことになっていた。

「腹が割けそうだ……」

大量の蕎麦を掻き込んだくちい腹を押さえながら、ぼくと深耶音は土手沿いの砂利道を歩いていた。

結局は三割程度の蕎麦が残ってしまったけれど、これ以上は食えないと土下座して許してもらったのだ。明らかに作り過ぎた深耶音の責任のような気がしたけれど、作ってもらっておきながら文句を言うのは何か違う気がしたからだ。

深耶音は肩からぶら下げた水筒を振り回しながら先頭を切って歩いていく。どこに行くのか、ぼくは知らない。深耶音が黙って付いてこいと言うから、仕方なく後を付いて歩いていた。

ぼくは自転車を使いたかったのだけど、自転車に乗るのが下手な

深耶音に反対されたので、仕方なく歩くことにした。砂利道や荒地が多いから、深耶音には歩きの方が安全で良いのかも知れない。

「まだ着かないの？」

「気が早いなあ。まだ十分も歩いてないよ」

「目的地を知らないと遠く険しい道に感じるんだよ」

「そうかなあ。ほら、あそこだよ」

深耶音が指で示した先には星乃湖と用水路を隔てる樋門ひもんがあった。樋門は田畑に水を送る為の、西織村存続に係わる最重要施設だ。

ここが破壊されるような事があれば村の作物は大打撃を受けてしまい、たちまち村人の生活は立ち行かなくなってしまうだろう。そのため嚴重なセキュリティが施されており、何重にも張り巡らされた鉄条網の間には地雷が敷設されている。なんて事はなく、幅が三メートル程度の小さな樋門だった。ここから村中に張り巡らせてある用水路を巡り、道路沿いを流れる河川となつて隣町へと流れていく。

「ここでザリガニ釣りするって、誠人ちゃんが言ってたんだよ」

元は小魚やタニシくらいしか住んでいなかった用水路に、いつしかザリガニが住み着くようになった。誰かが持ち込んだのは間違いないのだけれど、それが誰なのかは分かっていない。誠人だとする声が高いけれど、本人は否定している。

見た感じでは誠人達はまだ居ないようだ。居るのは小学部らしき連中だけで、笹で作った竿を持ってザリガニを釣っている。

「誰も居ないな」

「あれえ、午後から水門って言ってたのになあ」

「予定が変わったんじゃないの。中止になったとか、場所が変わったとか」

「んー、そうかも。ちょっと聞いてみるよ」

深耶音は小学生の所まで走っていき、二、三言葉を交わすとすぐに戻ってきた。

「なんかね、お母さんが迎えに来て、慌てて帰ったんだって」

「へー、他の皆は？」

「ザリガニが好きなのって誠人ちゃんだけだから、みんなは野球にでも行っただんじやないのかな」

「ぼく達も行くの？」

「うーん、それもいいけど……。そだ、ボートに乗りに行こうよ。湖から見るもみじつてきれいなんだよ」

紅葉なんて見飽きてはいるけれど、他にやることもないので素直に賛成する。ボートで競争するのも良いだろう。置いてけぼりで半べそになる深耶音を見るのも悪くないしな。

堤防を兼ねた土手の上を歩く。星乃湖の湖面には透き通るような空が映り込んでおり、まるで足元にも空が広がっているかのように見えた。暑い日に泳いでいる時など、まるで空を飛んでいるような気分になれる。申し訳程度の砂浜を見渡すと、やはり人っ子一人いなかった。湖で遊ぶには流石寒いからだ。この辺りに吹く風は昼間は山から下りてきて、夜は湖で冷やされた冷たい風が村を抜けていく。その冷風の発生源でもある場所に遊びに来たがる奴は滅多にいない。夏は大盛況だけれど、少しでも涼しくなると見向きもされなくなってしまうのだった。

星乃湖は周囲長19.7キロメートルのカルデラ湖だ。ほぼ真円を描いているので人造湖だと主張する学者がいるそうだけれど、ここで生活しているぼく達にはどうでも良い話だ。人の手で作られたのだとしても、別に今の生活が変わる訳ではない。

そんな事よりも、魚が繁殖しない方が問題視されていた。住み着かないのではなく、繁殖しないのだ。幾ら放流しても繁殖してくれなければ一代限りで潰つぶえてしまう。

当初は餌となるべき貝や昆虫、蛙などの両生類はもちろん、水草すら繁殖していないのが原因とも言われたけれど、それでは餌を撒き続けていたのに繁殖しなかった理由とはならない。今では仕入れ

た方が安いとの理由で、養殖施設はもちろんのこと、原因を調査していた調査チームも解散してしまっていた。

当然、不安視する声はあった。農作物はもちろん、飲み水にもなっている水だ。害があつては堪らない。

しかし、毎年役場が実施している水質調査では問題が発見されたことはないし、行政の発表では信用できないという有志によって調査された結果でも問題は発見出来なかった。マグネシウム、マンガン、カルシウム、鉄分などのミネラル成分が多く含まれた、ごく普通の美味しい水だったそう。

不安があつても専門家達の意見は安全な水で一致しているし、事実、水が害になった事はない。湖から取水している用水路には魚などが棲みついているし、村人全員が湖の水を使って何百年も経っている。動植物を死に追いやるような成分が含まれていたら、人間にだって何らかの影響があつて然るべきで、水を飲んで具合が悪くなったり死亡した村人はいない。放流した魚だって繁殖しないだけで餌を与え続ければ寿命を全うするのだ。そもそも騒いだのは新たに住所を移してきた人達だけで、昔から居を構えている村人には寝耳に水の騒動だったそう。

ボート乗り場には六艘の手漕ぎボートと、一艘のモーターボートが停留していた。つまり、全てのボートが使われずに繋がれているってことだ。

当たり前の話だけれど、暖かい時期はいつも満員御礼なのにちよつと寒くなると誰も乗らなくなってしまう。ぼくも越してきたばかりの頃は物珍しくて寒い時に乗ったりもしたけれど、雪が降ろうかというほど寒い時に乗った時には凍死するんじゃないかと思った。今日の様な少し肌寒い陽気くらいが限界だと思う。

桟橋への入り口には、一人が座っていられる程度の管理小屋が設置してある。管理小屋とはいっても、九條家へ繋がるだけの直通電

話が置いてあるだけで、常に誰も居ないし、鍵さえ掛かっていない。不用心と言うよりも、ここで悪戯をする村人は存在しないので鍵なんかいらぬのだ。

それはどうしてかといえば、ボート乗り場は九條家が設置して管理している施設だからだ。この村で九條の施設に悪さをしようと考える者は滅多にいない。誠人が率いる悪逆無道な連中ですら躊躇するほどに指導されている。

何故こんな施設を九條家が持っているのかといえば、湖を挟んで村の反対側に建っている九條の屋敷に行く為には湖を渡る必要があるからだ。九條屋敷まで通じる道はないので、屋敷に出入りするには船を使って湖を渡るしかなかった。

ここに常設されているモーターボートは九條家専用で、カバーが掛かったまま動いているのを見たことがなかった。ちゃんとメンテナンスとかしているのか心配だ。

手漕ぎボートも九條家の所有物だけれど、村人が自由に使えるように開放されている。本当は十六歳以上でなければ乗ってはいけない規則があるらしいけれど、そんな規則を守っては若者の名折れとばかりに破られまくっている。もちろん、ぼくだって守っていない。一番きれいなボートを選ぼうと桟橋を歩きながら物色していると、甲高いエンジン音が聞こえて来るのに気が付いた。湖面に目をやると、一台のモーターボートがこっちに向かって走って来ていた。

「あれ、ボートが来る」

「青いストライプの旗が付いてるから夕ちゃんのボートだね。お買い物かな」

「よく見えるなあ。ぼくには全然分かんないよ」

「昔からお蕎麦を食べてるから目が良いんだよ」

それは本気で言っているのか？ それとも冗談だろうか。

「あれ、二人乗ってるみたいだな。朝凧も一緒なのかな」

「それはないよ。佐保ちゃんから離れるのは一人だけって言ったもん」

「へえ。そうなんだ。じゃあ、もう一人は佐保か」

どうでも良さそうな情報に感心していると、深耶音が慌てたような声を上げる。

「そんな事より凄いスピードだよ。あれって止まれるの？」

言われてみれば確かに早い。後50メートルもないのにスピードを落とす様子がない。

「そうだな……無理……なんじゃないかな」

「ねえ、こっち来るよ、こっち来るよ！」

慌てふためく深耶音と、呆然とするぼくを目掛けて、凄いスピードのボートが突っ込んでくる。舵が故障したのだろうか。夕風が気絶でもしてるのだろうか。今はそんな事を考えている場合ではないのに、他に何を考えたらいいいのか分からなかった。ほら、あれだ。

こんな時は昔の事を思い出せばいいんだ。走馬燈って言っただっけ？

「きやああああああああ」

「うわああああああああ」

悲鳴は出てくるのに体が硬直して動けない。ボートは少しだけ方向を変えると、ぼく達の真横を通り過ぎていく。ボートの横面と棧橋が錯り合い、波との相乗効果で棧橋が崩壊するのではと思われるほど大きく揺れると、とても立つてはいられなかった。繋ぎ止めてあった何台かの手漕ぎボートが巻き込まれ、紛々になりながら吹き飛んでいった。水しぶきを被ったけれど、湖に落ちなかっただけ幸運だ。

波に大きく揺らされる棧橋に屈み込んだまま、ボートが走り抜けていった方向に顔を向けると、そこには凄まじい惨状が広がっていた。

散乱する手漕ぎボートの破片。モーターボートの直撃を食らって吹き飛んだ管理小屋。砂浜に刻まれた傷跡を追っていくと、堤防に激突して大破したモーターボート。

どう見ても大惨事だった。後少しの距離で巻き込まれていたかと思うと、ケガ一つないのが奇跡のようだ。

「た、た、大変だよ！ 事故だよ！ 救急車だよ！ 助けなくちゃだよ！」

ショック状態から抜け出た深耶音が立ち上がりながら叫ぶ。

「ま、まてまて、待つて。こ、こんな時は落ち着くんだ。冷静になるんだよ」

おたおたしている深耶音をサポートすべく、ぼくも立ち上がって冷静になれと諭した。

「そ、そうだね！ 冷静だよ」

「そうそう。クールになるんだよ。えっと、事故といったら、まずは人命救助だ。溺れた人を岸まで引き上げて人工呼吸だよ」

「うん、分かった。『はっ、はっ、ふー』だね」

「そうだ。『はっ、はっ、ふー』だ」

よし、落ち着いたし、深耶音との呼吸合わせも完璧だな。さあ、助けに行こう！

「お忙しいところ申し訳ございませんが、『はっ、はっ、ふー』は出産ではないかと」

「えっ、そうなの」

声を合わせた莫迦二人が声の聞こえてきた方を振り向くと、そこには夕凧と佐保が佇んでいた。いつの間に背後を取られたのだろう。油断も隙もない。

夕凧の隣に着物姿で突っ立っている少女が九條佐保だ。白い肌、整い過ぎた目鼻立ち、膝の辺りまで長く伸びている烏羽色の髪。丹色の和服と低い背も相俟って、国宝級の技を持つ職人が作り出した人形かと思紛うほどに完璧な容姿だった。

佐保は九條一族を統括する九條家の現当主だ。一條から数え上げて九條まで在る九家族が九條一族と呼ばれている。その一族の中でも頂点に君臨しているのが九條家であり、その現当主が佐保なのだ。そうだ。

つまり佐保が九條一族、延いては西織で一番偉いつてことだ。九條一族について詳しくは知らないけれど、佐保が村人から崇められ

ているのは知っている。九條当主は西織の指導者であり、庇護者であり、神だった。

でも、そんなのは大人達の話だ。ぼく達には関係ない。少なくとも崇められて距離を置かれることを、佐保は望んではいないのだから。

「…お久しぶりです。…瑞希に…深耶音」

のんびりとしたテンポで佐保が言った。ただの挨拶なのに、少し緊張してしまうのは何故だろうか。品格とか威厳みたいな雰囲気纏っているからだろうか。

「こんにちは。佐保ちゃんに夕ちゃん」

しかし深耶音には通用しないようだ。天然は何よりも強いからな。「うん、久しぶりだね。何年ぶりだよ」

朝風の冗談を夕風に返す。さて、姉はどういう切り返しをするのか楽しみだ。

「瑞希ちゃん、夕ちゃんは昨日遇ったし、佐保ちゃんは五日ぶりだよ。ホントに瑞希ちゃんは日にちの感覚ないよね」

やれやれ、仕様がないな、とでも言いたそうな深耶音の頬を掴み、満面の笑顔を浮かべながら思いつ切り引っ張ってやる。お前には聞いていないし、いい加減に冗談だと理解して欲しい。このまま社会に出たら空気の読めない奴だと迫害されかねないぞ。

「いはい、いはいよ、いはいいいはい、いはいつへは」

おお、伸びる伸びる。何だか楽しい。

「ごめん。日本語しか話せないんだ。深耶音語は難しくて理解できないし、理解する気もないんだ」

「ははへー」

両手を振り回して抵抗してくるけれど、動く深耶音が痛いだけで、ぼくは痛くも痒くもなかった。ジタバタしている深耶音を見ていると、あまりの愛しさに和んでしまう。

「瑞希様。なにやらお急ぎだったご様子でしたが、もう宜しいのですか」

「あつ、そうだ！ 人命救助の途中だったんだ。急いで助けないと！」

夕凧に言われるまで忘れていた。深耶音の頬を引っ張っている場合じゃない。

パチンと良い音がしそうな感じにまで伸びていた頬から手を離し、慌ててモーターボートまで駆け寄った。かなりのスピードで突っ込んだにも拘わらず、先端部が少し砕けているだけでキャビンに大した損傷は無いように見える。中を覗いてみるけれど、誰も乗ってはいなかった。

「あれ？ 運転手がいらない。投げ出されたのかな」

「運転手なら私ですが。何かご用ですか」

声の方を振り返ると夕凧と佐保がいた。付いてきていたらしい。

「夕凧、ふざけてる場合じゃないんだ。怪我人が居るかも知れないんだよ。急いで助けなさいと」

「…運転していたのは夕凧です。…怪我人はいません」

夕凧を肯定したのは佐保だった。佐保は嘘を言わない。少なくともぼくが聞いたことはない。一方、夕凧も嘘は吐かないけれど、分かりづらい冗談を言うから佐保よりも信用度は下だった。

「そう……なんだ」

「私って信用ないのですね……」

夕凧が瞳を逸らして呟くけれど、相手をしている場合ではなかった。

「そういう訳じゃないけど……。ホントに乗ってたの？ ホントに？」

俄には信じられなかった。激突したボートから棧橋の中程に居たぼく達の背後に立つまでに、一体どれほどの時間が必要なのだろうか。十秒、いや、二十秒でも無理だ。ただでさえ佐保は和服で草履履きなのだから、急ごうにも急ぎようがない。ぼくはそんなに長い時間を惚けていたのだろうか。

「本当です……たぶん。それよりも電話をお借りできませんか。船

舶管理の会社に連絡したいのですが」

たぶん？　なんだ、たぶんって。その一言が信用を落としている原因なのを気付いて欲しいな。

「電話ならそこに……って、管理小屋は無くなっちゃったのか。家まで来てくれるなら好きに使っていいけど」

ぼく達は携帯電話を持っていない。ぼくはお金がないから。深耶音は電話が必要になる場所に友達がいらないから。佐保は電話が嫌いだから。夕凧は主が嫌いな物を使用人が持つわけにはいかないという義務感から持とうとしなかった。

「それは助かります。早急に船の修理を頼まなければなりません」

「これって修理で直る程度を越えてないかな」

「何とかあります。……たぶん」

随分と弱気なたぶんだった。

「あれ、そういえば深耶音は？」

一番大騒ぎしそうな深耶音がいらないことに気が付いた。一体どこに消えてしまったのだろうか。

「……深耶音なら、桟橋で蹲すくまっていました」

桟橋まで戻ると、真っ赤な頬ほを擦りながら蹲る深耶音に睨みまれた。

湖沿いの道を広がって歩く。広がるといっても横に並らんでいるわけじゃない。狭い砂利道なので、四人が思い思いに歩くと道幅いっぱいになってしまっただけだ。車が来たら畑や原っぱに避けるしかないけれど、車に出会うこと自体が減多になかった。出会ったから朝と夕方の通勤時間帯くらいのものだ。

「それにしても、なんで止まれなかったの。どこか故障？」

気になっていた事故の原因を聞いてみた。もう少しで巻き込まれるところだったのだから、聞く権利くらいはあると思う。

「壊れてなどいません」

夕凧の答えは丁寧でありながらぶっきらぼうに聞こえる。これが

夕凧には普通の話し方なのだ。決して機嫌が悪いとか、ぼくが嫌われているわけではない。……たぶん。

「分かった。居眠りしてたんでしょ」

「いえ、実は瑞希様を見付けた姫様が急かしたからです。早く岸に着くようにと」

「それで減速もしないで突っ込んだのか？ めちゃくちゃだなあ」

「私は姫様の忠臣。姫様の望みであれば、命を代償にしても叶えてみせます。例えば先日の話ですが、有明……」

「…夕凧。…今夜はピーマン尽くしがいいです。…一緒に食べましょう」

夕凧の会話を遮るように佐保が呟くと、夕凧は震えながら口を閉ざす。嫌いなのか、ピーマン。

「ねえ佐保ちゃん。今日は夕ちゃんと遊びに来てくれたの？」

「…はい、…ご迷惑でなければ」

「ないない。迷惑なんてどこにもないよ。瑞希ちゃんが掛けてくる迷惑と比べたら、小石とエアーズロックくらい違うよ」

「おいおい、佐保がエアーズロックだなんて言い過ぎだよ」

「姫様。この身の程を弁^{わきま}えない与太者に、教育を施すご許可を」

夕凧が背中の小太刀二刀流に手を掛ける。殺気が感じられる。どうやら本気のようなのだ。

「…駄目です。…許可しません」

「……命拾いしましたね、瑞希様」

許可が出ていたら真つ二つになっていたのだろうか。ぼくはコメディアンじゃないんだから、とても冗談に命を賭ける気にはならなかった。しかし、ぼくってそんなに迷惑を掛けているのだろうか？

「…変わった家が建ったと聞きました」

「ああ、わざわざ見に来たんだ。丁度良い……って言ったら悪いか。その家ってうちの隣なんだよ」

「…船から見えたお屋敷で…間違いないようですね」

「良かったですね、姫様。良い口実が出来まして」

「明日は茄子尽くしにしましょう」

「あ……ううう……」

夕風は呻きながら顔を伏せて落ち込んでしまった。

茄子も嫌いなのか。余計なこと言わなきゃ良いのに。

「ねえ、瑞希ちゃん。今日って畑仕事してる人が少ないと思わない？」

深耶音は立ち止まり、畑が広がる風景を眺めていた。つられて立ち止まるも、畑仕事なんか気にして見たことがないので違いが分かるはずがない。どう見てもいつもと同じ風景としか感じられなかった。

「どうだろ。こんなもんじゃないかな」

「でもね、濱見のおじちゃんが言ってたよ。一昨日から秋野菜の収穫とか、冬への準備とかで忙しくなったって」

「ほら、昨日で終わっただとか、日曜だから休んどるかさ」

「そんなに早く終わらないと思うけどな。農業に日曜は無いとか言ってたし」

それは分かる。気儘きままに見える自営業ほど休みが無いものだ。

「たまたまだって。気にするほどの事じゃないし、気にする意味が分からないよ」

「そうですよ。気にしすぎると脱毛してしまいます」

夕風が何故かばくの頭を見ながら言う。冗談でも止めてもらいたい。

「うーん、……そだね。気のせい気のせい、気のせいだよ」

「……深耶音は西織をよく見てますね。……好きですか……西織」

「うん、好きだよ。景色も空気も水も人も、み……んな優しいもん」

「……そうですね。……わたしも好きです」

「瑞希ちゃんは好き？ 嫌い？」

「ぼくは……」

どうなんだろう。改めて聞かれると困ってしまう。

住む場所としては嫌いなのだと思う。

お店は地域密着タイプで生活雑貨しか置かれていないし、新商品が入荷されることも滅多にない。隣町まで行けば大概の物は手に入るけれど、村から出るにはバス以外の選択肢はなく、しかも午前と午後には一回ずつ運行するだけ。午前中に出かけて、午後の便で帰ってくるしかない。

テレビなんて四番組しか映らないし、国営放送ですらノイズにまみれている。目がチカチカしてくるほどだ。殆どの家庭はケーブルテレビを入れているらしいけれど、うちは親父のテレビ嫌いもあって入れてはいなかった。

カラオケ、ボーリング、バッティングセンター、ゲームセンターにビリヤード、考え得る限りの娯楽施設が影も形もなく、山奥のくせに温泉すらもない。

不便で、退屈で、やたらと緊密な近所付き合いが鬱陶しい。

でも……。

でも、そんなのは、どうでも良い事なんじゃないかと、最近になって思い始めていた。

空気や水が美味しくて、採れたての野菜なんかデパートで売っている物と同じ種類だとは思えない味がする。

それに最近では感覚が麻痺したのか、不便な事を不便に感じていなかったりもする。それどころか、不便な事を楽しく感じていた。景色の移り変わりは見ているだけで楽しいし、穏やかに流れる時間は心を落ち着かせてくれる。景色や時間が、ぼくの心を優しく包み込んでくれている錯覚すら憶える。

嫌悪感を抱いていた場所なのに、今では都会で暮らしていた十年よりも、西織で過ごした五年間が遥かに貴重で大きい。だから西織に越してきて良かったと、今のぼくなら言える気がする。

「別にどっちでもないよ」

しかし、口から出てきたのは曖昧な答えだった。好きだなんて恥ずかしい言葉を言えるはずがない。言おうとしただけで顔が火照ってしまう。

「瑞希様、顔が真っ赤ですよ」

「ホントだあ。何で、どうして。分かった、恥ずかしいことを考えてたんでしょ」

「…恥ずかしいこと……、ポッ」

「姫様に好ましくない妄想ですか。斬り捨てますよ？」

いつの間にか恥ずかしい言葉が、恥ずかしい妄想に変えられていた。何だかセクハラをされている気分だ。

「ちっ、違うよ。絶対に違うから、取り敢えず刀から手を放そうよ」

「…夕凧…瑞希が淫らな妄想に囚われるはずがありません。…わたしが保証します」

いや、そんなことを保証されても……。

「瑞希ちゃん、まずいよ。こんなに信頼されちゃったら、あの段ボール箱を処分しないと大変なことになるよ」

「ば、莫迦。こんな時に何てことを。無いから、そんな段ボール」

「さあ、早々に瑞希様のお宅に伺いましょう」

伺って何をする気だ、夕凧。

「は、入らせないぞ。部屋には入らせないからな。電話を貸すだけだからな」

「私を止めたければ特殊歩兵を一個中隊はご用意下さい」

「…大丈夫。…わたしは信じています」

「……もう、どうにでもして」

ぼく以外のみんなが笑っていた。夕凧の表情は変わらないけれど、笑っているような気がした。

そんなみんなを見ると、命が危ういというのに楽しくて仕方ない。

ただ歩いているだけなのに、ただ話しているだけなのに。

楽しいと思える要素なんて無いのに、こんなにも楽しく感じるのは何故なのだろうか。

四人並んで洋館を眺める。口を開けて眺めるその姿は、端から見たら随分とマヌケな光景かも知れない。

「誰もいないな。村中の人が見に来るかと思ったのに」

「見に来てたよ。瑞希ちゃんも寝てたから知らないと思うけど」

「そっか。見物人は午前中に集中してたのか。情報が早いと言うか、暇人とも言つか。……人のことは言えないけれど。」

「……きれいなお屋敷ですね。……風情を感じます」

抑揚のない話し方で在り来たりな感想を佐保が述べる。この程度の屋敷を見慣れている佐保には、特になんの感慨も浮かばないのかも知れない。

「姫様、玄武館に似ていませんか」

「玄武館？」

初めて聞く名前だった。どこかの有名な建物だろうか。

「……当家の敷地に建っている館です。……玄武館と呼ばれています」

佐保が答えると、深耶音が食い付いた。

「それと似てるの？」

「はい。放置されている玄武館よりも立派ではありますが、建物自体は非常に似ています」

「そうなんだあ。同じ人が造ったのかな。そんなに似てるなら見てみたいかも」

深耶音が建築物に興味を抱くなんて珍しい。親父の影響でも受けているのだろうか。

「……深耶音、……見たいですか？」

佐保は思案するような間を開けて問いかける。見せたいけれど、見せられない。そんな感じだろうか。

「うん、見たい見たい。佐保ちゃん家^ちって行ったこと無いけど、凄^{すご}いんだろっかねえ」

九條屋敷は大きい。とにかく大きい。建物が大きければ敷地も広い。しかも西織だけでも本家と別宅が在り、星乃湖を囲むように三カ所に点在していた。車で行ける屋敷が二カ所有り、村から星乃湖

を挟んだ反対側に本家と呼ばれる屋敷群がある。一般に本家だけを指して九條屋敷と呼ぶけれど、正確には星乃湖と周囲の山をも含んだ、早い話が集落の在る盆地以外の全域が九條屋敷なのだそうだ。つまり山々は庭であり、星乃湖は庭に在る池、集落は玄関の様なものらしい。

「…大きいだけです。…住んでいるのは三人だけなので…しゅきやうかん請客館以外の建物は閉じてあります」

「へえ」。噂には聞いてたけど、ホントに三人しか住んでないのかもつたない」

「事業を行うには不便な場所ですから。九條家以外の御家族は出てしまわれました。今では東京の御屋敷が本家のようなものです」

実際は佐保が追い出したと噂されているけれど、公式には夕凧の言った理由が使われていた。おいそれと本当の事を言えないでなんて、体裁を取り繕うのも大変だ。

「…わたしはお飾りですから。…名ばかりの本家で偉そうにしているだけ。…らくちんなお仕事です」

どこまでが本気なのか分かりづらいことを佐保が言う。どう返したのか悩む話題だった。

いつのまにやら九條家の話になっていた。珍しい洋館だとは思っけれど、佐保達には見慣れた普通の家だった。これといった話題が出てこないのは仕方ないだろう。そもそも九條屋敷が在るのだから今更村に似つかわしくない洋館が増えたところで、誰も珍しいとは思わないのかも知れない。

せめて住人でも出てくれば、話のネタになるのに。 などと思っっていると、玄関の重そうな扉が開いた。

「あれ、小父さんが出てきたよ」

深耶音の言葉どおり、屋敷から出てきたのは親父だった。まったくがっかりだ。

「おーい。小父さーん」

家までの最短距離を進もうと原野を踏破しはじめた親父を深耶音

が呼び止める。まったく余計なことを……。

「おおつ、佐保姫に夕風嬢ではないですか。今日はボランティア活動ですか。偉いですなあ」

「……お久しぶりです」

「こんにちは、柚賀原様。ボランティアとは何の事でしょう」

「愚息の相手をしてくれてんだろ。立派なボランティアだ」

「ああ、なるほど。納得致しました」

「……わたし偉いです。……立派です」

なるほど、ぼくと遊ぶのは慈善行為なのか……。納得するなよ、二人とも。

「煩いからあっち行けよ。親父」

ぼくを貶める元凶である親父を追ひ払おうと、強い口調で言い放つ。

「ひいひい、深耶音ちゃん。息子が邪険にするよう。暴力を振るうよう」

深耶音の背後に回り込み、泣きマネを始める親父。ああ、本当に殴ってやりたい。

「ダメだよ瑞希ちゃん。お父さんは大切にしないと」

深耶音は親父に甘い。激甘だった。必ずといっても言い過ぎではない程に親父の味方をする。もしかすると自分の父親と重ねているのかも知れない。

「はあ、まあいいや。それで打合せは終わったの」

「そんなに早く終わるかアホ。ちよつと資料を取りに戻るところだマヌケ」

ああ、蹴り飛ばしてやりたい。

「ねえ、資料ってなに？ 何でここから出てきたの？」

「あれ？ 話してなかったかな」

親父が洋館から出て来る理由を深耶音が知っている筈がない。何しろぼくと親父が話してた時には蕎麦を茹でていたのだから。

「はっはっはっ。何を隠そう家具を注文されたのさ。しかも家の中

の家具を丸々全部ときたもんだ」

「ええっ、凄ーい。こおーんな大きな家の家具を全部だなんて凄すぎだよ」

「わっはっはっ、そうだろう、そうだろう。この中の家具が全部！俺様色に染まるのさ」

「嫌な表現ですね」

夕凧が呟いた。

「…想像してしまいました。…気分がすぐれません」

どんな想像をしたのか、佐保が口を押さえて俯いてしまった。

「あっち行けよ。親父」

ぼくは生ゴミを漁る鴉を見るような目をしながら親父に吐き捨てる。

「はわう。冷めた視線で熱く見みないでくれえ〜。父さん感じちゃう」

「本気でどこか遠くに行ってください」

車に子供を放置したままパチンコに熱狂する母親を端から見るとな目をしながらお願いをする。思わず切望してしまう程に切実だった。

ああ、首を絞めてやりたい。

「ちっ、ちきしょうー！二回も言いやがってえ〜。お願いしやがってえ〜。憶えてろよ、いつかギャフンと言わせてやるからなあ！」

親父は捨て台詞を残して作業場に走り去っていった。捨て台詞の小物ぶりが実に嘆かわしい。

「ゆーがーはーらー、みずきいー！ー！」

親父が居なくなつて清々したと思っていたら、ドップラー効果を伴いながら背後から自分を呼ぶ声が聞こえてきた。殺気を感じ、声の発生源を確かめることなく真横に跳ぶ。

「うりゃああつ！」

喊声かんせいと大地を穿つ音が同時に発生した。

地面を一回転し、足が大地を捉えた瞬間に蹴り上げて立ち上がる。次の攻撃を避ける為に大きく跳び退ると、転がったときに掴んでおいた小石の一団を跳ぶ前に居た場所に目掛けて投げつける。襲撃者は予測どおりの位置で固まっていた。転がった先を予測して攻撃をしようとしたら、目標がすでに移動していたので見失ってしまったのだろう。

ぼくの方が一手先を読んでいた。避けようにも、もう間に合わない。

小石が襲撃者に当たるかと思った瞬間、持っていた得物で全ての小石を弾いていた。とても人間業とは思えない挙動だ。

動きを止めた襲撃者を見ると、細長い金属の棒を携えていた。ぼくが襲撃を受けた場所に開いている細長い穴は、あの棒が開けたものだろう。そして、その棒を握っているのは朝風だった。

「それは反則だ！ そんなので叩かれたら危ないって！ 死んじゃうって！」

「あははっ、すごい、すごい。朝風の一撃を避けちゃうなんてすごいです。肩は逝くはずだったのに、完璧に避けちゃいました。しかも、反撃をしてくるなんて流石です。成長著しいですよ、瑞っち」
「誉められても嬉しくないよ。遇う度にやられてれば、嫌でも上達するっての」

そう、これは特訓だった。朝風は不意打ちで攻撃をし、ぼくはそれを避けて、あわよくば反撃をお見舞いする。昨日は避けられなかったけれど、今日みたいに声を上げてくれれば、自然と身体が反応して避けられるようにまでなった。

強い攻撃の時は大振りだから避けやすいのだけれど、最近では隙の少ない攻撃を多用してくるようになった。一打の威力が小さいとはいえ、早めに反撃をしてコンビネーションを止めないと、気付いた時には全身が痣だらけになって動けなくなってしまう。

何とか捌けるようになってきたと思つたら、今度は武器まで持ちだしてきた。流石武器は危ない。もしも捌けなければ大怪我で入院か、鬼籍に入ることになるだろう。朝風に頼んだのは遊びに勝つ為の稽古なのに、そんな事で殺されては堪らない。

しかし、これも王者である誠人に勝つ為だ。だから誠人が完敗を認めている唯一の人物に師事することにしたのだ。どうして誠人が朝風に勝てないのか、四年経った今なら分かる。それはもう、師事を頼むんじゃないかと後悔するほどに。

「あははっ、次からは反撃されても止めないようにするね」

それって絶対に叩き込むって言われてるような。ひょっとして、ぼくは朝風に恨まれているのだろうか。

朝風が棒状の何かをしまう。それはどう見ても伸縮式の指し棒だった。

ほら、黒板に書かれた文字や図形などを指し示したり、寝ている生徒を叩いて起こす為のアレだ。最近ではレーザーポインタに取って代わられているらしいけれど。

朝風が持っている指し棒は一段目だけが黒い光沢を放っており、『高級感を出してみました』と主張していた。やっぱり先っぽはボールペンになっているのだろうか。

じっと指し棒を見ていると、その視線に気付いた朝風は体でガードするように指し棒を隠す。

「なんですか。これは朝風の宝物ですから、欲しくてもあげませんよ」

「いや、知らないけど。それって指し棒だね。授業なんかで使う」
「使うかは知らないですけど、そのことだと思いますよ」

「ちよつと見せてくれないかな。昔憧れてたんだよ。偉い学者みたいで」

少し悩んでから、怖ず怖ずと差し出してくる。そんなに嫌なら断れば良いのに、断り切れないところが朝風だった。夕風だったら断ってきただろう。

一見すると、それはどこの文具屋にでも売っていそうな、さして珍しくもない普通の指し棒だった。引き伸ばしてみても一段目が重すぎてバランスが悪いくらいにしか思えない。これでは思い切り振り回せば簡単に折れてしまうだろう。

「さっき朝風が打ち込んだのって、これだよな」

「そうですよ。護身用につて夕姉から貰ったのです。因みにですね、昨日叩いたのもそれです」

「ホントにこれ？　こんなので強く叩けるとは思えないけど」

こんなに貧弱な指し棒では振り回すだけで折れてしまい、あそこまでの激痛を生み出せるとはとても思えない。しかも土とはいえ地面に穴を空けているのだ。幾ら何でも無理な話だ。

「あはっ、コツがあるんですよ。夕姉直伝です。瑞っちには無理ですから、いい加減に返して下さい」

差し出してきた手に指し棒を乗せて返す。何だか必死な感じがした。そんなに大切なものなのだろうか。

「コツねえ。納得できるような、できないような……」

悩んでも答えは出そうになかった。実際にやってみせたのだから出来るのだろう。

「……朝風。……用件があるのではないですか」

佐保が話を促す。確かに留守番しているはずの朝風が用もないのに彷徨っているわけがない。その辺りの規律は厳しらしく、奔放に仕事をしている様に見える朝風ですら厳守している。

「あつ、そうでした。佐保姫様、急用です。至急お戻り下さい」

「駄目でしょう朝風。しっかり報告なさい。いつも言っているですよ。あなたは……」

「……朝風。……これは放っておきなさい。……はい……詳細」

佐保は説教を始めた夕風をこれ扱いして朝風に続きを促した。朝風は助かったとばかりに詳細を伝える。

「はい。ご報告しますです。一條様が面会を求めていますです。早急の御用件だそうですので、お知らせに参りました」

「…そう。…仕方…ありません。…では戻りましょう。…瑞希、深耶音、わたしは戻ります。…招待をして頂いたのに、申し訳ありません」

佐保がゆつくりと頭を下げて謝る。ぼくは慌てて周囲を伺った。

こんな所を村人に見られたら大騒ぎだ。謝ることになったのは、ぼくかも知れない。それ程までに九條家宗主は神聖視されている。

「謝ることなんか無いよ」

「そうだよ。友達に気兼ねはいらないよ」

深耶音はもう少し気兼ねした方が良くと思うけれど、水を差すのも何なので黙っていることにする。

「…あの…その…、…また……」

佐保は口籠もる。何を言おうとしているのか分かった。

「ああ、また遊びに来てよ。何ならそっちに遊びに行くから」

「…それは……駄目です」

逡巡しながらも、ハッキリと答える。いつもそうだ。佐保は家まで遊びに来て欲しそうにしながらも、誰が近付くことも許さない。

しかし、遊びに来て欲しそうなのが見え見えなので、今日こそは誘ってくれるんじゃないかと、つい水を向けてしまう。

「姫様、御招待致しては如何でしょうか。請客館であれば問題は無いと思います」

夕凧が佐保を執り成すなんて珍しい。

「…ですが……」

「良いじゃないですか姫様。遊びに来て貰いましょうです」

「お持て成しの準備であれば二日も頂ければ完了します。セキユリテイも問題ありません。進んでお招きください」

凧姉妹の説得を聞き終えると、曇っていた佐保の表情に晴れ間が微かに覗いた。何かが吹っ切れたかのような顔つきだった。

「…夕凧…朝凧。…ありがとう」

「感謝の言葉を賜るには及びません」

「そうです。朝凧も楽しみなのです」

佐保はぼく達に向き直り、頬を赤く染めながらいった。

「…瑞希…深耶音…遊びに招待しても宜しいか」

堅苦しい招待の仕方だったけれど、佐保らしいといえは佐保らしい。しかし、それはぼく達の間では相応しくない。

「ちがうよ。遊びは招待したり、されたりするもんじゃなくて、一緒に遊びたいから行くんだし、来るから一緒に遊ぶんだよ。だから友達を誘うときは『遊ぼう』だけで良いんだ」

「そうそう。招待なんて言われたら緊張しちゃうよ。でも佐保ちゃん家に遊びに行けるなんて嬉しいな」

本当に嬉しそうな表情を浮かべる深耶音。その幸せそうな笑顔を見ていると、ぼくも幸せな気分になってくる。

「…ともだち……」

「姫様……」

俯いてしまった佐保を心配した夕風が呼び掛けると、顔を上げた佐保が言い直した。

「…瑞希…深耶音…遊びに来なさい」

気恥ずかしいのか、赤くなった顔には期待と恐れが入り交じって、ひどく複雑な表情をしていた。こんな事が簡単に言えないなんて、実に佐保らしいと思う。なにせ、ぼくと出会うまでは屋敷の中から滅多に出た事がないそうだから、遊びに誘うような友達是一人もいなかったのだろう。風姉妹は仲が良いとは言っても、どこかに使用人という壁が存在するし、何より同居しているのだから誘う必要もない。

「うん、いくよいくよ。ゼツタイ行くよ」

「行ってやるから覚悟しといてよ。お茶菓子食べ放題に、散らかし放題だ」

間髪入れずに返事をする、今まで見た事のない柔らかな微笑みを浮かべた。

「…はい。…それくらい覚悟します。…契約です」

「堅いなあ。仲間なんだから約束でいいんだよ」

「…そうですね。…では…約束です」

嬉しそうに微笑む佐保の後ろでは、風姉妹も微笑んでいた。夕風の表情はいつもの仏頂面だし、朝風はいつも笑顔を浮かべているけれど、ぼくには微笑んでいるように見えた。

「あのさ、夕姉。覚悟するのは朝風達じゃないのかな」

お茶菓子を用意するのも、散らかる予定の部屋を片付けるのも、全部風姉妹の仕事だった。

「そうね。でも、姫様が楽しそうだから良しとしましょう」

「うん、そうだね」

風姉妹は佐保を見つめながら、変わらない表情で微笑み合った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2287d/>

悠久の終わりに

2010年10月10日16時57分発行